白鷗大学教育学部論集
2023，17(2)，17－67

原著論文

南島素描04
宮古諸島のカンカカリャとツカサンマ

齋　藤　正　憲[1]

秋九月の乙亥（きのとのい）の朔己卯（つちのとのう）（五日）に、群臣に詔して、熊襲を討つことを協議された。時に、神がおられて、皇后に神がかかって、神託を垂れて、「天皇は、どうして、熊襲が服さないのを心配されているのか。そこは、荒れはてた不毛の地なのだぞ。どうして、兵を挙げて討伐する価値があろうか。＜中略＞海のかなたの国がある。＜中略＞新羅国（しらきのくに）という。もしよく私を祭ったならば、少しも刃を血でよごさないで、その国は、かならず自然に服属してこよう。また、熊襲も服従するにちがいない」

天皇は、神のお言葉をお聞きになって、疑いの気持ちをもたれた。そこで高い岳（おか）に登られて、はるかに大海を御覧になったけれども、広々としていて国など見えなかった。そこで天皇は、神にお答えして、「私は、遠くを見たが、海だけあって国はなかった。どうして大空に国があろうか。いたずらに私を誘（あざむ）くのは、どういう神なのか。＜中略＞」と仰せられた。その時、神は、また皇后にかかって、「水に映る影のように、鮮明に、自分が上から見おろしている国を、どうして国がないと言って、私の言葉を誹謗されるのか。天皇はそのように言われて、どうしても信じられないならば、あなたは、その国を得ることができないであろう。ただし、いま皇后がはじめて御懐妊になった。その子は、その国を得られることがあろう」

[1] 白鷗大学教育学部
e-mail：m3110@fc.hakuoh.ac.jp

と述べられた。しかし、天皇は、なおも信じられないで、強引に熊襲をお討ちになった。勝利を得られないで、御帰還になった。
（傍点筆者、井上光貞監訳、川副武胤・佐伯有清訳（2020）『日本書紀上』，中公文庫，359-356頁）

はじめに

琉球弧のシャーマニズムに関心を抱いた筆者は、まずは、石垣島におけるフィールドワークに手を染めた（齋藤 2022a，b，2023a）。とりわけ、ツカサとカマンガーの協働体制には、瞠目（どうもく）させられた（齋藤 2022b：86-87）。この協働のあり方は、根人と根神による往時の「二重主権」（鳥越 1971：215）を彷彿（ほうふつ）とさせる。「沖縄本島においては、元来部落社会においては根人（にーちゅ）、根神（にがみ）が祭祀を中心に部落を統率していたが、按司時代となってからは祭政分離し、根神の上に一村または数村の祭祀を司るのろをおき、按司の居城を中心とする地域には按司の姉妹がのろとなって、おやのろなどと呼ばれ、間切内ののろを統率する地位にすわるようになった」（野口 1972：212）というから、二重主権の起源は古代にまで遡行（そこう）する可能性がある。とてもではないが、看過することなど、できやしない。

そして、この体制は、天皇と皇后が政治と宗教を分担した初期天皇制（吉本 2016：343）をも連想させよう。初期天皇制について、『日本書紀』を紐解（ひもと）けば、目に飛び込んでくるのは、皇后に「神がかかって、神託を垂れ」たという逸話（いつわ）である（冒頭引用文）。その真偽をここでとやかく論じるのは、本稿趣旨からの逸脱に過ぎる。フォーカスしたいのは、女性である皇后が「神憑り」をした点。この図式を、根人・根神の二重主権体制に敷衍するのなら、女性である根神こそが、神憑りによって神託を得る役割を果たさなければならない。翻（ひるがえ）って、石垣島においては、根神の末裔（まつえい）たるツカサたちが、なるほど、憑依能力を発揮するケースもある（齋藤 2023：58-59）。しかし、こうした能力はあくまでユタとして発揮するのであり、ツカサとして臨む公的祭祀の場では、「形骸化」された「骨抜きの

神女」（櫻井 1979：121）に徹しているように、筆者には映った。彼女たちは、司祭と巫者を巧みに演じ分けていたのである。

琉球シャーマニズムをさらに掘り下げようと、新たなフィールドとして選んだのが、宮古諸島である。本稿作成時点で、すでに3回の現地調査を遂行し、カンカカリャ（巫者）5名、ツカサンマ（宮古諸島におけるツカサ（司祭）の総称、比嘉政夫 1998：53-54）2名へのインタヴューを終えた。カンカカリャ・ツカサンマの聲（こえ）に耳を澄（す）ませつつ、若干の考察を加えたい。それが本稿の主眼だ。

1．カンカカリャ

（1）YFさん

YFさん（71歳・男性）の認識では、宮古島ではユタを、ムヌスー[(1)]とかカンカカリャと呼ぶ。どのように自称・他称するかはつまり、呼称の違いに過ぎないのであるが、YFさんは自らをカンカカリャだと考えている[(2)]。カンカカリャという呼び方が、しっくりくるというのだ。何故（なぜ）なら、「神憑り（カミガカリ）」するからこそ、カンカカリャだから。神憑りとは「神歌」を歌うことにほかならず、彼は毎日、それを実践しているという。

「突如として神に追われる」

「神が乗り移って、さまざまな現象が起こる」

YFさんによれば、カンカカリャになりたくて、なれるわけではない[(3)]。さまざまな「現象」に直面し、悩み、苦しんだ果てに、それが「神様事」や「先祖事」、「霊に関わること」だと腑（ふ）に落ちてくるのである。彼の知るとあるケースでは、寝たきりだったところで、突然、神が降りてきて、いてもたってもいられなくなる。家族や仕事があったとて、神は容赦などしてくれない。「神に呼ばれて」、御嶽などいろいろな場所に「行かされる」のである。

YFさんは「神の世界」だけでなく、「霊の世界」もあると考えている。悪い霊に取り憑かれても、本人は神様だとしか認識できない。そのような

状況が２～３年つづくこともあるが、すべてが修行なのだという。どんなに苦しくとも、逃げようという感覚は出てこないのだとか。

守護神がいて、守護霊がいるといい、それは追い追い分かってくる。カンカカリャは守護神・守護霊の「お供」をしなければならない（佐渡山 2019：83)。このうち、守護神は「マウガミ」と呼ばれる[(4)]。最初は五里霧中であるから、父方・母方の神、水の神様、海（龍宮）の神様、里（土地・部落）の神様、さらには祖父母にまつわる神々の「お供」をする。そうするうちに、徐々に自分の守護神・守護霊が定まってくるのだという。神のお供をつづけると、巫病の症状が次第に落ち着いてくる。なお、お供の具体的な内容は、縁（ゆかり）の御嶽や拝所（うがんじゅ）を訪ね、拝みをすることである。

YFさんには20歳のころから、「現象」が起こりはじめた。不眠や食べられない状態に陥って、とても苦しい状況がつづく。当時、氏は沖縄本島の大学に進学し、国文学を専攻していた。源氏物語で卒業論文を書こうと思い定めた矢先、「神ダーリ」（いわゆる巫病、宮城 1979：486，赤嶺 1983：62，高梨 1989：19)が彼を襲う。神ダーリになると毎日、「神の声」が聞こえるのだという。神の声は、「頭のなかの方で見えて、聞こえてくる」が、夢で知らされたり、他人の行動で伝えられることもあるとか。

たとえば、午前３時、眼に痛みを覚えたかと思うと、神の声が聞こえてきた。内容は「真の人間の育成」に関わるもので、肉体と精神を合致させなければならず、食欲・性欲に負けてはならぬという主旨の啓示であった。20分ほどの出来事だったという。そのほか、神の道や愛について、さまざまな神の声が聞こえてくるので、YFさんは可能な限り、ノートに書き留めている。取材時、そのノートを見返しながらYFさんは、神の道と仏の道が密接につながっていることを、神から教わったと回想してくれた。神からの言葉はつぎのような内容であった。

「釈迦の悟りを悟り、孔子の悟りを悟り、キリストの悟りを悟り、ソクラテスの悟りを悟り、まるめなさい（統合しなさい)」

別の機会には、彼と姉の２人は「神の子」、「生き神」であると告げられ

た。そのうえで、神としてひとびとを救い、導くように指示されたという。ノートには、「神は善悪を定め、悪を滅ぼす。定めのとき」とも記されている。これを肝に銘じ、感謝・道徳を大切にしつつ、YFさんは与えられた使命を果たそうと蹠(もが)いているのである。彼は、ほかのカンカカリャと一緒に拝むことはないというが、近年では、ともに世界平和の祈願をしたいと考えており、また、実践もしている。もちろん、経費は嵩(かさ)むけれど、YFさんの崇高な使命感の前ではさしたる障碍(しょうがい)とはならない。私財を投げ打ってでも、勤めを果たしたいと強く願っているのである。

一番苦しかったのは、大学３年から４年にかけての時期だ。当時、卒業論文に取り組んでいたのだが、とてもではないが、書き上げられる精神状態ではなかった。不調に陥れば、講義・論文執筆どころではない。大学のある沖縄本島から宮古島に戻り、「神願い」をする。状態が落ち着いたら、また本島に戻るということを繰り返すはめに。本島でも、ユタを紹介してもらって、相談に行った。その際、ユタからは「早くマウガミさまのお供をしなければならない」との助言を受けた。その言葉にしたがって、宮古島に戻り、カンカカリャをしていた姉に判断をしてもらい、翌年、成巫したという。YFさん24歳のときであって、奇(く)しくも、自らの干支の年にカンカカリャとして歩みはじめたのである。

だから、結局、大学は卒業できなかった。神の道に専念するため、会社勤めをした経験もない。副業など許されていないのだ。さまざまな失敗をさせられて、それでもなお、神事に邁進(まいしん)しなければならぬ。生涯、修行である。その人生は決して安寧なものでなく、むしろ苦しいことばかりだけれど、それでも、真摯(しんし)に神と向き合えば、神が導いてくれる。これによって、相談者を正しく導くことができ、信頼も得られようというものだ。

成巫後２年間は、「カミンチュ」(5)に師事して、経験を積んだ。那覇で見てもらったユタに「あなたは神高いので、早くお供をしろ」といわれていたので、七宮八社、久高島、首里、伊江島などを巡拝した。ただこのとき、本来は宮古島の御嶽・拝所から巡るべきところを、誤って本島から

回ってしまったので、症状は悪化してしまう。カンカカリャの姉に相談して、再度、お詫びの巡拝をしたという。YFさんはこれまでに300箇所以上もの御嶽・拝所を巡り、神々に祈りを捧げてきた。

カンカカリャとしての活動をはじめると、100件もの相談が舞い込んだという。夜10時まで拝みつづけても、１日20件が限界だ。キャパシティーをはるかに超える相談が殺到して、カンカカリャとしてきわめて多忙な日々を送っていたという。そして、活動が軌道に乗ってくると、心身ともに落ち着いてくる。すると、人並みに勤めをしてみたいという欲が湧き上がってきた。役所への採用が決まったこともあったが、採用されたとたんに、倒れてしまう（体調不良）。ライブハウス経営などにも手を出してはみるものの、あえなく、失敗。神様に嫌われれば俗人に戻れるのではないかと考え、麻雀・飲酒など悪いことに手を染めてみても、どうにもこうにも、うまくいかない。よくないことが起こってしまう。このように、神はカンカカリャをどん底に落とすが、それは、どん底に落ちたときの心を知りなさいというメッセージなのだ。紆余曲折を経たYFさんは、現在、そのように達観している。

彼は判断や祈願事をする。願いにもさまざまあり、地鎮祭、お祓い、屋敷願い、運気願い（健康願い）など多岐に及ぶ。病気対応も行なうが、彼の認識では、精神疾患は遺伝関係もあって対処が難しい。そんな場合には、心療内科の受診を勧めることもあるという。「お医者さんがナーラ　カミサマナーラ」（医者が半分、神様が半分）という沖永良部島の格言を思い起こさせよう（蛸島 1983：109）。当該の精神疾患が憑依に関わるものであれば、カンカカリャとしての能力を駆使して、霊を外すのである。なお、YFさんのところに来た相談者のなかには、心療内科にかかっていたけれど症状が改善しないため、カンカカリャにも相談するよう担当医に勧められた方もいたそうである。

実際に「火の神」移動（引越し）の拝みを観察する機会に恵まれたので、以下に紹介したい。拝みのために、定食（さしみ、煮物、天ぷら、ご飯、

汁）が支度されていた（これは途中の休憩時間に、参加者でいただいた。筆者も相伴にあずかった）。さらに洗米、生米、塩、酒(泡盛)、きびなご(煮干し)、豆腐、餅、ジンゴウス（神菓子）など一連の供物も用意される。ほかに、りんご２、みかん５、バナナ７、餅（２段）３も準備されていた(写真１)。加えて、線香や「じょう」（半紙を三角形に小さく折り畳んだもの）も用意される。13：30には現場に入り、最終的な下準備をしたあと、13：50に拝みがはじまった。彼の装いは作務衣であった。移動してきた火の神を台所に設置し、居間のテーブルのうえに並べられた供物の手前に置かれた香炉（ステンレス製の大型ボウルを活用していた）で大量の線香を焚き、神歌を唱じる。およそ８分にわたる歌謡であった。歌謡は、①カンムダテ(神を「もだてる」・呼びかける)、②ウクイ（神歌）[6]・カングイ（神の声、真下2003：175)、③アーグ（アヤグ、祝い歌）[7]で構成されるという。途中、依頼者との会話（確認や状況説明）を挟みつつも、14：15までには、屋内での拝みは一区切りついた。

写真１　供物（YFさん）

一休みしてからは（食事休憩)、つづいて、屋外である。敷地の四隅と玄関にて、土地の神様を拝む（写真２)。屋内においてと同様に、供物や果物を献じつつ、歌を謡い、線香を焚く。むろん、歌謡も簡易的なもので、焼香も少量である。「生き魂（前の居住者の魂)」を祓い、新しく入居する家族の幸せを祈るのが目的である。14：30から15：20まで、50分ほどを屋外での拝みに費やしていたから、各箇所10分ほどの時間をかけていた計算になる。

屋内に戻り、再度、歌を謡う。15：25から15：50まで、およそ25分が、これに割かれていた。15：50からは、供物が載せられたテーブルの前で

写真２　屋外での拝み（YFさん）

ウチカビ（紙銭）を燃やし、16：00には一同合掌して、終了を迎えた。13：30から16：00、およそ２時間30分に及ぶ拝みであった。

彼のところには、千葉をはじめ全国から相談者が訪れ、また、請（こ）われて東京や九州に出向くこともある。短い判断で3,000円、１～２時間の判断で10,000円、願いなどは35,000～50,000円ほどで請け負っている。大きな会社の願いともなれば、それ相応の「布施」をいただく。実際に、内地の企業が土地を購入し、ホテル経営をはじめるので、祈願をしてほしいとの依頼は、しばしば舞い込むのだとか。

このようなYFさんを、ご両親はどのように受け止めたのだろうか？

そもそも姉もカンカカリャとなっており、親族にもユタ・カンカカリャは少なくなかった。そのような境遇も手伝ってか、両親（父は平良、母は多良間島の出身）は幼いYFさんをユタに引き合わせていた。そのユタは彼が神高いことを一目で見抜いたのであろうか、病気になったり、命が危ないので、彼を内地に行かせるべきではないと忠告している。実はYFさん、東京の大学への進学も頭にあったが、両親は頑（かたく）なにOKを出さなかった。

YFさんはツカサや御嶽に対して、特別な感情を抱いている。現在彼が住まう地域（部落）には年間35もの祭祀があるが、ほとんど参加することはなく、カンカカリャとして「日取り」(8)を行なうのみだ。それでも、「行事が止まると、地域が悪くなっていく」と信じており、御嶽祭祀の存続にはきわめて積極的である。現在、彼が住まう地域では、役員がツカサ・ユーザス・トゥムザスを選び、祭祀を執り行なう。かつて、ツカサは終身制であったが、子育てなど家庭の事情を鑑み、３年の任期制に改められた。神高い女性がツカサに選ばれ、任期終了後、カンカカリャとなるケー

スも少なくなかったという。祭祀を執り行なううちに、神が乗り移って、「カミンチュ」として覚醒するのであった。しかし現在では、ツカサに選ばれても、辞退する候補者があとを絶たず、深刻な後継者不足に悩まされている。

ところで、石垣島のツカサはいわゆる「米占」を行なうが（齋藤2022a：110，117）、YFさんは米占をしない。彼の認識では、米占はあくまで占いであって、ツカサは豊作を願って米占をする。一方でカンカカリャの真骨頂は占いではなく、神憑りである。神の声を直接聞くカンカカリャに、占いは不要なのだ。

しかし、カンカカリャ・YFさんのツカサに対する思いはいたってニュートラルである。そもそも、祖霊はツカサ、自然神はカンカカリャと棲み分けていると彼は考える。本島では祖霊崇拝が盛んで、よって、ノロ（ツカサ）が優勢となるが、宮古島では神（自然神）が重要視され、カンカカリャの需要も少なくない。ともあれ、両者が神霊に関わることに違いはない。なお、彼は拝みや願いのときに白衣を着用することもあるが、この白衣は本来、ツカサの装束であるとの認識を持っている（「神張り」）。YFさんにとって、カンカカリャとツカサの違いは、憑るか憑らないかにかかっているようだ。

（2）YGさん

宮古島出身で現在も宮古島で暮らすYGさん（72歳・女性）は、ご主人（警察官）の転勤にあわせて、これまでに20年ほど、沖縄本島で暮らしたことがある。母親がユタで、御嶽祭祀にも関わっていたという（ユタが公的祭祀に関わっていた！）。母に請われて、手伝いなどもしていたが、ユタにはなりたくないというのが偽らざる本音であった。しかし、神ダーリに見舞われ、自然にユタの道を歩むようになったという。

そんなYGさんは、幼少のころから「倒れたりした」。小学校のときには授業に身が入らず、机に突っ伏してしまうのもしばしばで、教師にチョー

クを投げつけられ、叱られたことさえあった。小学校のときに、御嶽から声が聞こえてきて、訝(いぶか)しく思ったという経験もした。神ダーリの予兆とも解されよう。

中学校を卒業後、沖縄本島の美容師専門学校へと進み、静岡への転居を挟みつつ、３年ほど那覇のパーマ屋で勤務している。その後、宮古に戻った。勤務の前後から、成巫するまで、彼女は断続的に神ダーリに苦しめられることとなる。具体的には、「ご飯も食べれない、水も飲めない」状態に陥ってしまい、そうなると、神の声が聞こえてくるのだ。

YGさんの家筋は西原に拠点を置くが、池間島からの移民で、いわゆる「池間民族」である（笠原 1996）。曽祖父が小学校を誘致したことから、実家は「学問屋(がくもんやー)」と呼ばれていたという。そんな学問屋に生まれた母が、ユタをしていたのである。そこに見えるのは、ユタに対する敵意などではない。惜(を)しみない愛着こそが、垣間見えるであろう。

母は生前、娘に「自分がムヌスーをしていて、娘が継がないのは部落に対して恥ずかしい。だから、必ず継いでほしい」としきりに懇願していたという。YGさんには姉妹がいたが、みな嫁に出てしまっていて、西原にとどまっていたのは彼女だけだった。だから、自分が継ぐしかないと覚悟を決めた。母が亡くなったタイミングで、彼女は成巫している。簡単な神開きはしたが、御嶽巡りなどはしていない。亡き母を継いで「そのまま御嶽に入った」とYGさんは説明してくれた。カンカカリャでありながら、その帰属先は御嶽だと認識しているのである。彼女は実際に、神役にも選出され、一時期、御嶽祭祀の中核を担っている（後述）。カンカカリャと御嶽・ツカサを切り離す意識はどこまでも希薄であって、巫者と司祭は渾然一体(こんぜんいったい)としている。

警察官であったご主人は、当初、自分の妻がカンカカリャになったことに懐疑的であったが、神の知らせを伝えるうちに徐々に理解を示してくれるようになり、現在では全面的に受け容れてくれている。やるなといわれたら、離婚するつもりであったと、YGさんは当時の決意を語ってくれた。

現在では、死ぬまでつづけたいとの思いを持っている。三女の娘（孫）が３歳と１歳で、彼女たちが大学を出るまで、元気でいたいとの思いからである。

YGさんは関東にも拠点を持っており、宮古島と関東を行き来している。滞在しているマンションのオーナーも、彼女の顧客である。オーナーの娘さん（現在大学生）は小学校４，５年のころ、一言も喋（しゃべ）らず、放心状態に陥ってしまった。途方に暮れていたところ、YGさんの評判を聞きつけて、相談に訪れた。彼女が塩と酒（泡盛）を使ったお祓いを施したところ、娘さんの症状は快方に向かったのである。これをきっかけに、関係がはじまり、格安でYGさんに住まいを提供する間柄となった（無償ではない）。オーナーは近隣に35もの物件を所有しており、土地の拝みをYGさんが一手に引き受けた格好である。またたとえば、貸していたマンションの店子（たなこ）が亡くなられた際、彼女にお祓いをしてもらうこともあるという。継続的にYGさんにさまざまな相談を持ちかけており、「顧問ユタ」とでも評したらよいだろうか。

筆者は実際に、関東に滞在中のYGさんを訪ねて、話を聞くチャンスにも恵まれたが、その間にも、定期的に相談をしているという看護師の方が幼児を連れて挨拶に訪れていた。彼女はかつて、娘（長女）のことで悩みを抱えていたが、同僚看護師の紹介で、YGさんを知り、以来、３年ほどの付き合いになるという。彼女自身は宮古島を訪れたことはないが、YGさんが千葉に滞在しているときに、さまざまな相談を持ちかけるのである。

写真３　YGさんによる口寄せ
手前左側に座るのは相談者

また、インタヴューのあとにも、願い（拝み）が１件入っていた（写真３）。それは、半年ほど前に亡くなった相談者の亡父

写真４　口寄せ儀礼の供物（YGさん）

の「口寄せ」で、守護霊と父の霊が降りてくるというものであった。以下、その概略を紹介しよう。

用意された供物は米（生米）、洗米、神菓子（たまごボーロで代用）、いりこ（煮干し）、塩、酒である（写真４）。YFさんと異なり、YGさんは豆腐を供物にはしない。これらは２セット用意されていたが、YGさんの認識では、夫婦膳ということになる。稲荷寿司や簡単な惣菜も準備され、供物を載せたテーブルの足元に置かれていた。これらは、一連の拝みが終了したあとで、参列者（YGさん、相談者、相談者の付き添い）で食していた。

YGさんは白い装束を羽織り、一連の拝みに臨んでいた（写真３）。焼香しながら歌謡し、説諭するというスタイルはYFさんと基本、変わるところがない。YGさんの場合、歌謡20分、説話（カウンセリングに近いか？）20分、再度の歌謡20分の三部構成となっていた。第二部・説話の際には、YGさんから伝えられる亡父の言葉に、相談者は感極まって涙を流し、神妙に聞き入っていた。なお、YGさんは、拝みの１週間前から、肉・魚・卵を口にしない。

取材当日、挨拶に来た看護師の方が受けた巫術についても、話してくれた。深刻な肩こりに悩まされていた彼女に対して、YGさんは浴室にて塩・酒を振りかけながら、叩いたという。除霊・祓除（ばつじょ）の類（たぐい）であると想像されよう。施術後、不思議なことに、症状は劇的に改善した。彼女が定期的にYGさんに相談する所以（ゆえん）である。

YGさんは相談全般に応じ、屋敷願いなどもこなす。マブイグミもできるが、米占はやらない。神が直接教えてくれるので、その必要がないのだ。この点はYFさんと同じである。

相談料は、3,000円～が基本である。余裕のないひとは3,000円で構わないし、余裕があれば10,000円払ってくれたって、いい。あくまで、そのひと次第。YGさんはそんな考え方である。相談者はさまざまな差し入れも持ってきてくれるから、それをまた別の相談者に持たせたりもする。手厚く返礼するので、きわめて良心的であり、だから、「そんなに儲かるわけじゃない。食べるのに困らない程度」だと話してくれた。

このような拝みの方法・手順は、母が亡くなったあと、つまりは亡母の霊が教えてくれたという。母の生前にはYGさんは嫌がって、自分から習おうとはしなかったのである。さらには、亡母だけでなく、神が教えてくれることもあり、その場合には、その手先だけを見せて（イメージ）、やり方が示される。はじめのころは、手順も深く理解しておらず、不安だったが、神は「安心しろ、やり方を示すから」と背中を押してくれた。実際、半信半疑でやってみたら、亡母の霊や神が手取り足取り教えてくれて、恙（つつが）なく拝みを完遂できたという。

彼女には、取り憑いた霊が見え、よって、透視・幻視の能力を備えていると見做すことができよう。「テレビみたいに映るさ」というから、かなり鮮明に視覚できるのであろう。また霊などは、匂いで現れることもある。酒呑みだったひとの霊が現れれば、酒の匂いがするという。声が聞こえる場合もある。

西原は多くの御嶽を擁しているが、現在では、村落祭祀に参加するひとが少なくなったとYGさんは嘆く。西原部落には本物のカンカカリャは２名のみで、ほかには自称ユタが何人かいるという。みな女性であり、神ダーリを経験している。男性も夢を見るなど、一種の神ダーリを経験するものの、本人には神意が汲み取れないのである。

西原地区の神役組織はつぎの通りだという。①ウフンマ、②アーグスンマ、③ナカバイ、⑤アーグスンマヌトモ、⑤ウフンマヌトモの５人体制が基本だ（ここに、ヒューイトリ（日取りをするユタ）が含まれる）[9]。ウフンマが最高位にある。第２位のアーグスンマは神歌を謡う役回りで、か

つてはユタが務めていたという。「白い着物を着るひとと、歌を歌って憑かるひとがいる」というのが、YGさんが慣れ親しんだ祭祀の１コマである。白い衣装に身を包んだツカサ（ウフンマ）が最高位であることに疑いの余地はないが、憑依能力のあるユタが、ウフンマに次ぐ地位を占め(アーグスンマ)、祭祀を盛り立てていたのである。以下、ナカバイは供物の準備担当で、アーグスンマヌトモ・ウフンマヌトモは、アーグスンマとウフンマの補佐役である。YGさんはアーグスンマヌトモをウフンマヌトモより先に挙げてくれたが、これは、憑依能力を有するカンカカリャとしての自負の現れなのかも知れない。

ところで、YGさんのご主人は自治会長に選ばれ、任期（３年）をまっとうしている。その時期、YGさんもナカバイに選ばれ、ツカサンマとして３年任期を過ごしたのである[(10)]。当時は自治会から、ツカサンマたちに手当が支給されていたという。金額は年間、ウフンマ26万、アーグスンマ25万、ナカバイ７万、アーグスンマヌトモ・ウフンマヌトモ５万であったという。ウフンマとアーグスンマが際立って重要視されていたこと、それでも、ほんの少しだけ（１万円分)、ウフンマが持ち上げられていたことが分かる[(11)]。ナカバイ、アーグスンマヌトモ、ウフンマヌトモについては、ここから大きく評価が下がるものの、それでも、若干、ナカバイは優遇されていたと評せよう。もちろん、支給金額に変動はあったであろうが、金額の多寡(たか)は、神役組織内の序列感覚を如実に物語っているはずだ。祭祀における憑依の重要性は、否(いや)が応(おう)にも、際立ってこよう。

（３）YHさん

YHさん（82歳・女性）は、荷川取(にかどり)に暮らしている。宮古水産高校（現・宮古総合実業高校)家政科を卒業後も本島や内地に転居することなく、ずっと宮古で過ごしており、生粋の宮古島人だ。一度、結婚式に招かれて、東京に足を運んだほかは、内地を踏んだことはない。拝みをするために、ごくまれに沖縄本島を訪ねるが、観光目的で島を離れたりはしない。多くの

インフォーマントが熱心に取り組む御嶽・拝所巡りについても、彼女はしない。後述するように、YHさんの巫術は祖霊との交信がメインであり、このために、御嶽巡りをさほど重視しないのかも知れない。

彼女は20歳で結婚している。嫁ぎ先はかまぼこ屋を営んでおり、ご主人はその次男坊であった。結婚後は、婚家の家業を手伝いながら、子ども５名を育て上げた。ちなみに、YFさん（カンカカリャ）は親戚にあたる。

彼女は巫病（神ダーリ）も「いっぱいした」。寝込んでしまったり、力が入らないなどの症状に苦しめられたそうだが、それでも、これは神に選ばれた証（あかし）であると、前向きにとらえるようにしていた。20歳のとき、母に神開きをしてもらい、晴れて、カンカカリャになったという。さもありなん。先祖代々、カンカカリャを輩出する家系に生まれたYHさんにとって、巫病を得て、カンカカリャになるのは自然かつ必然だ。彼女で５代を数える。だから、神がこれから６代目を選ぶはず。高齢ながら、彼女は先行きに不安を感じておらず、泰然自若（たいぜんじじゃく）としている。

カンカカリャになることに、不安はまったくなかったという。祖母の霊が、あれこれと指示を与えてくれるからだ。相談者が引きも切らず、あっちが痛い、こっちが痛いなどという暇さえなかったという。60歳まではかまぼこ屋の仕事もパートで手伝っていたため、目の回るような忙しさだった。カンカカリャとしての対応は、どうしても、昼間の仕事が終わってからになる。だから、寝る暇もなかったとか。「とにかく、疲れた…」、それが彼女の偽らざる感想である。

YHさんの場合、関係する祖先の霊に指示を仰（あお）ぐのが基本的なスタンスである。相談の時間はケースによるが、通常、２～３時間を費やす。宮古島では部落ごとにツカサがいるというが、ツカサ当人が相談に訪ねてくることもある。相談者の多くは宮古のひとだが、東京から相談に来る場合もある。内地からは定期的に訪ねてくる顧客もおり、YHさんの巫力が高く評価されているのが窺（うかが）われる。

巫術としては、マブイグミや屋敷願い、憑霊、魂を外すこともできると

いう。彼女は「声も聞こえるし、ものも見える」から、神霊と対話・交信して、神霊の希望を相談者に伝えるのである。神（霊）の言葉はその場で紙片にメモし、それを相談者に渡す。彼女はこの一連の行為を「判断」と表現していた。判断は自宅にて応じており、自宅には龍神の祭壇が設（しつら）えてある。主として口コミで集まってくる相談者には、女性が多いと話してくれた。相談料は特に設定はしておらず、そのひとの気持ちだけを頂戴するというから、「心づけ」に近いだろうか。

カンカカリャの知り合いはいるが、互いに忙しく、連絡することはあまりないんだとか。一方で、健康拝みや安全祈願など、部落の祭祀には極力、参加するようにしているという。

何故か？

実はYHさん、御嶽のツカサを兼務しており、彼女がいなければ、祭祀が成り立たないのだ。彼女がツカサを務めるのは、近所のウプムイ（大森）御嶽である（写真５，６）。彼女の祖母も母もカンカカリャとウプムイ御嶽のツカサという二足の草鞋（わらじ）を履（は）いており、彼女の後継者もそうなるだろうと信じて疑わない。「巫者＝司祭」（齋藤 2022a：123-129、佐々木宏幹は「シャーマン＝祭司」と表記している、佐々木宏幹 1983：95）が、ここでは当たり前の風景となっている。

写真５　ウプムイ御嶽（入口・鳥居）

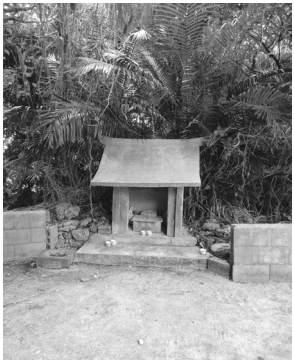

写真６　ウプムイ御嶽の祠（拝所）

荷川取の部落祭祀は毎月のように開催される。先に触れた健康拝みや安全祈願のほかに、海神祭（漁の安全祈願）、豊年祭などがある[12]。スケジュール的にはタイトだが、それでも、パカニンジュ（氏子）も多く、みなが盛り立ててくれるという。とりわけ、息子とその嫁たちが協力的で、熱心に手伝ってくれる。荷川取に暮らす親族も少なくないため、祭祀のときには、駆けつけてくれるのだとか。荷川取のひとは就職で本島や内地に出ても、退職すると、戻ってくる場合が多いのである。ここでは、地域社会の絆はいまなお健在だ。なお、ウプムイ御嶽を所有する家に嫁いで来た女性たちも、甲斐甲斐（かいがい）しく祭祀を手伝ってくれるという。

なおYHさんによれば、狩俣部落もかつてはカンカカリャがツカサを兼ねており、「巫者＝司祭」の状態が宮古島島では常態だったと認識している。ただし、狩俣では現在、ツカサが出ておらず、彼女は大いに憂（うれ）いていた。

カンカカリャよりもツカサとしての職責の方が重要だと、YHさんは認識している。何故なら、部落のために、御嶽祭祀を守っていく必要があるから。公的祭祀にはツカサとして臨み、私的相談にはカンカカリャとして対応する。そのように区別・峻別をし、かつ、ツカサの職務を優先させる。させながらも、カンカカリャとしての活動も手を抜かない。等しく、全力投球なのである。なお、公的祭祀にあたっては、供物を献じ、線香を焚く。かたやで、私的相談は専（もっぱ）ら霊視に頼る。それが、YHさんのスタイルとなっている[13]。

（4）YIさん

伊良部在住のYIさん（63歳・男性）は、ユタ・カンカカリャである。「ユタですか？ カンカカリャですか？」との問いに対しては、きっぱり「一緒です」と答えており、特段のこだわりを持っているふうではないようだ。判断、透視、お祈り、地鎮祭、土地のお祓いなどを守備範囲とし、神の言葉を伝えているという。彼はカンカカリャではあるが、憑依はしない。神の言葉は胸に入ってくる。ただし、直截（ちょくせつ）的ではなく、「自分で深く

解釈しなければならない」。胸に入ってくるため、明確な言葉や映像ではなく、ぼんやりとした感触・イメージのようなものだと表現してくれた。つまりは、霊視を得意とし、ユタ的色合いが濃いといえよう。

小学校のとき、父に連れられて、サシバ（タカ科の鳥、大越 2010：166）を狩りに出かけた。その帰り道、オートバイが動かなくなり、動かなくなったオートバイを押しているときに霊が見えたという。無数の霊が、オートバイを押しとどめていたのだった。もちろん、父や同行者には霊など見えず、YIさんだけに見えた。帰宅後、出迎えてくれた母は、彼が霊を引っ張ってきてしまったことを一目で見抜いたという。カンカカリャでこそなかったものの、彼の母は神高かったのである。

YIさんにはたくさんの神々が「教えてくれる」が、とりわけ祖先神・祖霊が多い。彼によると祖霊は、ひとが生まれた瞬間にそのひとに「ピタッと憑く」。そしてそのあとの人生を一緒に歩むのだという。

YIさんのこれまでの半生は、波瀾万丈そのもの。小学校から高校にかけて、どうしても勉強が手につかなくなる時期があった。振り返れば、それは巫病（神ダーリ）であったと考えられるだろう。寒気を感じたり、妙にイライラする（落ち着かなくなる）ようなことがしばしばあったが、それでも、起き上がれなくなるほどではなかったという。高校進学にあたっては、那覇に住む祖母を頼って、本島に出てはみたものの、体調不良（巫病）のせいで学業をつづけられなくなり、中退を余儀なくされている。その後、伊良部に戻り、消防職員として働いた。

転期は40歳のころ、突然訪れる。あるとき救急車両に乗って現場に到着したところ、寒気を覚え、膝がガクガクと震え出した。頭痛が起こり、吐き気も催した。彼は「第六感の開き」と表現しているが、あるはずのない空間が目の前に開けて、そこに亡くなった方の姿が。腹部に包丁を突き刺して自死している情景が見えたが、現場もまさにその通りであったという。警官からはどうして知っているのかと詰問（きつもん）され、容疑者扱いをされてしまう始末。もうこの仕事はつづけられない。退職を決意し、職場に戻る

とすぐに辞表を書いたという。当然、父親には激怒されたが、この出来事をきっかけに、「感覚が鋭くなっていった」。

母と一緒に宮古島のユタを訪ね、相談したところ、マウガミ（守護霊）を持つように勧められた。マウガミを立ち上げてくれたこの「師匠」（伊良部在住の95歳・女性のユタ）に、神開きもしてもらったという。

YIさんはマウガミ（彼の認識では祖霊である）を祀り、本格的な修行・訓練をはじめることとなった。それは10年ほどつづいたが、その間、夢を見せられたり、いろいろなところを歩かされた。まだまだ納得できなかったので、方々（ほうぼう）のユタを訪ね歩き、判断を取ってもらった。また、御嶽巡り・離島（久高島、伊平屋島など）巡りにも、精を出した。当然、修行に駆り立てられている間は仕事もできず、収入も途絶える。当然ながら、家計は火の車。奥様がパートをかけ持ちして、なんとか凌（しの）いだという。

50歳のころ、ようやく納得できる境地にたどりついたと思えたため（透視力も身についてきた）、ユタとして生きる決意を固め、「道が開けた」のであった。YIさんは、ユタの仕事はひとを導くことだと考えている。これまでに６～７名の「親ユタ」になっている。親になったひと（弟子）とは、波長が合うのだとか。それは、会った瞬間に分かるという。本人が来たり、そのひとの親が連れて来たりする。親が連れて来る場合などは、子どもの神ダーリの相談であることが少なくない。相談者は女性が多いが、男性もいる。最終的に、ユタになる場合もあれば、自宅で祈るだけのひともいる。それぞれが与えられた役割を果たすのであり、結局は守護霊の導きであると、YIさんは達観している。なお、神社の神主を勤めながら、ユタとして活動する後進もいるといい、興味を惹く。

一般的な相談（拝み・判断）を定期的に持ちかけて来るのは、宮古・伊良部で30名ほどを数える。本島・内地からの顧客も合わせると、トータル50～60名ほどのクライエントを抱えている状況だ。相談者がYIさんを訪ねて来ることもあれば、出向く場合もあり、年に３～４回は内地に、14～15回ほどは本島に、それぞれ足を運ぶ。

YIさんによれば、伊良部島には50名ものユタがいるという。令和２年度の人口が4,495名であることを踏まえると、実に、100人に１人が巫者である計算だ。

個人相談の料金は気持ちでよいと考えている。彼の認識では、沖縄本島では一律5,000円であり、これが一応の目安になるが、20,000円も30,000円も取るのは好ましくない(塩月 1999：8)。家計を圧迫してしまっては、本末転倒だと考えているのだ。

YIさんは基本、何でもできると胸を張る。相談者に憑いている霊がぼんやりと見えるため、その霊と向き合い、悩みを解決する糸口を探る。また、墓や火の神の移動などの依頼が舞い込むこともある。屋敷願いでは、四隅４箇所と中央の１箇所、玄関の左右２箇所の計７箇所の神々に祈るという。供物を捧げ、線香を焚いて丁寧に祈るので、４時間ほどを要する。細かな作法は神が教えてくれるので、ともかく自分は虚心坦懐(きょしんたんかい)、拝めばうまくいくのだとか。

YIさんの認識では、ユタとツカサは棲み分けているという。ただし、彼の祖父母世代には、御嶽祭祀にユタが入っていって、何も分からないツカサに教えるのが常であった。形式化した祭祀であったとしても、「神憑かり」を求めるひとびとの思いが変わることはなく、そのためにツカサもユタの介入を歓迎していた節(ふし)がある。ところが近年では、ツカサがユタに耳を傾けないと、彼はこぼしていた。一方で、たとえば、10月に実施される豊年祭には、YIさんも白衣を纏(まと)って参加するが、ツカサに遠慮して途中で退席してしまう。部落祭祀はやはり、ツカサがしっかりと取り仕切り、執り行なわれるべきだが、それができていない。自分にはやるべきことが分かっているので、聞いてほしいが、聞いてくれない。教えてやりたいが、聞く耳を持ってくれない。でも、ユタである自分が出しゃばるのは僭越(せんえつ)に過ぎるし…　YIさんの複雑な（そして屈折した）心境が透けて見える[14]。

と、かくて、往時、祭祀を盛り立てていたユタとツカサの二人三脚という蜜月は損なわれ、すれ違いが生じているのは明らかだ。部落祭祀の消失

を招く、由々(ゆゆ)しき事態と評せざるを得まい。

ユタであるYIさんは、２つの御嶽を清掃・管理している。比屋地（ピャーズ）御嶽と東大嶺神社である。ツカサ不在のために、荒れるに任せる状態だったものを、見るに見かねて、YIさんが清掃・管理を買って出たのだ。それは、12〜13年ほど前のことであった。荒廃した御嶽を通りかかったら、大きな白鷺が見えたという。これを彼は、神からのメッセージであると解したのだ。できることなら、ツカサを立てて、きっちりと祭祀を執り行なうべき。それが、あるべき姿だと、彼は信じて疑わない。

現在、伊良部のツカサは３年の任期制となっている。候補者のなかから、御籤で選ばれる。近年ではあちこちで、選ばれても断る候補者が増えているが、神に選ばれたのであって、本来断ることは許されていないはず。しかし、経済的理由（働かなくてはならない）を主張されては、無理強いもできない。厳しい現実の前では、理想さえ色褪(いろあ)せてしまうのだ。

現在、御嶽の神役構成は、ウフンマ(最高位)、ナカンマ(神高い)、ウットンマ（小間使い）の３人体制となっている。最高位のウフンマが、神高い（よって、憑依する）ナカンマに相談することもあるという。この点を看過しては、なるまい。何故なら、神高い人物がツカサの神役を務めるうちに、覚醒し、任期を終えたのちにはユタとなる筋道が浮かび上がってくるのだから（佐々木伸一 1983：101)。これはYFさんの語りともピタリと符合しており（本稿24-25頁)、きわめて興味深い。宮古島ではそして、男性の自治会長（これも３年任期であるが、長期に渡って務めるケースもある）が御嶽の管理者となる。自治会長の役回りは、石垣島のカマンガーのそれに相当すると考えてよかろう（齋藤 2022b：69-74)。

（５）YJさん

YJさん（50歳・男性）は、自分を仏事(ぶつごと)専門のユタだと心得ている。「肉体を離れたひと（魂）の供養」が主たる職能である。成仏できない霊が、彼を頼ってくるので、成仏させてあげるのが使命だ。

伊良部・佐良浜出身の父と本島・うるま市出身の母との間に生を享(う)けた。母方の曽祖母、父方の祖母が、それぞれユタであったという。幼いころから、霊に嫌がらせをされて、毎日、夜も眠れず、とても不快だったと振り返ってくれた。金縛りにあったり、声を聞かされたYJさんは幼かったこともあり、怖くて怖くて仕方がなかった。本人はこれを、ユタの家系だから、霊に悪戯(いたずら)をされたのだと解釈する。対策として、電気を点灯したまま、布団の上から塩をまいて、就寝していたという。

高校１年生になったころ、あるとき、金縛りにあった。そのとき、試しに脚に力を入れてみたら、そちらに霊が移動したので、右手が自由になった。自由になった右手で振り払ったら、「解(ほど)けた」。以来、金縛りにあうことはめっきり少なくなった。体力がついてきたので、自力で解けるようになり、霊も悪戯がし難(にく)くなったのではないかと、彼は述懐(じゅっかい)している(15)。

YJさん、生まれ・育ちは沖縄本島であり、本島の高校を卒業したあと、内地に働きに出た。千葉や東京で１年あまり働き、20歳のころまでには、沖縄本島に戻っている。霊感の強い彼は、悪い霊が漂う場所を察知でき、避けることができた。内地では、そんな場所が瞬時に分かったという。沖縄に戻ってからは、タクシーの運転手などをしていた。

多良間島出身の妻との結婚を機に、宮古島に移住した。35歳のときのことで、以来、15年、宮古島に住みつづけている。宮古で借家住まいをはじめたころ、火の神を祀った。その際、線香に触れたときから、「夢の知らせ」がどんどん舞い込むようになった。あるとき、夫婦神が枕頭(ちんとう)に立った。そして、神の声(神声(かみごえ))を聞き、「魔物」を追い祓う力を授かったのである。それからというもの、霊的存在が怖くなくなったというから、不思議なものだ。このとき耳にした神声（呪文のような唸り声）を真似(まね)て口に出すようにしたら、うまく霊に対応できるようなったという。

神声を出すようにしてからしばらく経ったころ、掛け軸が夢に出てきた。掛け軸に描かれた坐像の薄目から、大量の光が放たれたという。夢から覚めても、首のうしろが熱く感じられ、何故だか、自分が蟻のような

ちっぽけな存在に感じられた。そのように、神に教えられたのである。以来、１年半もの間、肉・魚が食べられなくなってしまった。しかし、無性にマグロの刺身を食べたくなったので、臨済宗の寺院に相談に行った。住職は、栄養が偏るのもよくないので、「命を、あり難(がた)くいただきます」といって食べるよう諭してくれた。その際、本堂の本尊を拝んだが、その尊顔は夢に出てきた坐像のものであった。でもそれは、そのときだけのことで、２回目以降は別の顔だった…。この不思議な体験を、YJさんは「神の知らせ」だと受け止めている。38歳のときの出来事であった。

知らせを受け取った彼は、御嶽や拝所を訪ね歩き、懸命に拝んだという。そして２年後、40歳のときに、ユタに立ち合ってもらい、「マウガミを上げた（自分の神棚を設ける儀式を行なった）」のである。YJさんの認識では、マウガミとは「チヂ神」である。チヂとは一般に、「自分たちが仕えており、自分たちを導いてくれる特定のカミや遠い祖先のこと」（リーブラ 1974：33）とされる。結果的に彼は、４柱のマウガミを上げた（香炉が４つある）。マウガミを立ち上げる直前には、わさわさと血が騒ぎ、落ち着かない気分になったと回想してくれた。マウガミを上げないと危ない、神棚を持たないと身に害が及ぶという切迫感・焦燥感に苛(さいな)まれていたのだ。

マウガミを上げてからしばらくは、まさに、神憑かっていたという。当時はタクシーの運転手をしていたが、客を乗せても、告げられる前に、行き先が分かるのである。あるときなどは、乗客が姿を見せる前に、その職業が思い浮かんだ。実際に確認してみると、その通りであったという。また、オーラ（生体エネルギー？）が色で見えるようにもなった。だから、紙片にクレヨンでその色を表現し、乗車した観光客に渡したところ、たいへん喜ばれた。そこで彼は、１回100円を頂戴してもいいかとマウガミに確認したところ、男神の声で、「自分の利のために動くな」と一刀両断(いっとうりょうだん)されてしまう。謝礼をもらうことはできないと観念するしかなかった。今でも、謝礼を受け取る許可は正式には降りておらず、だから、原則的にはボ

ランティアで、もらうにしても、薄謝にとどめているという。だから今も代行運転の仕事に精を出し、これが主たる収入源となっている。

「仏のほうからも、知らせが来た」。釈迦がYJさんの夢に出てきたり、夢で真言宗という文字（墨書）を見せられたりもした[16]。神の声で、般若心教を唱えるよう、指示が下ったのである。神声の場合でもそうだが、般若心教を唱えると、身体から何かが沸き上がってくるような感触を覚えるという。

YJさんは、起業の相談に乗ることも少なくない。いわゆる屋敷願いとなるが、その土地で、握り拳大ほどに小さくなっている霊を探し、見つけては話をし、供養してあげるのだ。土地神に遭遇することもある。強い力を感じた場所に立つと、映像が浮かんで来る。あるときは、石を載せられた大蛇がこれをどけてくれと訴えてきた。マウガミにアドバイスを乞うと、自宅の神棚に供えてある酒を撒けば、願いが届くというので、YJさんはその指示にしたがった。当該の場所には、掘削土が盛り上げられていたので、いずれは盛り土を撤去してもらう確約をオーナーより得て、土地神に宣誓した。この際には、線香を焚き、祝詞を唱え、読経した。さらには言霊でも伝えた。そうなのである。現在、「言霊で伝えたほうが、伝わる気がする」というのが、彼の信条となっている。

アパートを建設する予定の不動産業者に頼まれて、予定地の屋敷願いをした際には、女性や男の子（小学生くらい）など、計８体の未成仏霊が見えた。鈴を鳴らし、神声で呼び出し、供養したが、そうすると、さらにつぎつぎと見えてきた。３時間半ほどをかけて、すべての未成仏霊を供養するしかなかった。炎天下での過酷な作業となり、さすがにこのときばかりは、5,000円の謝礼を受け取ったという。それでも、安い。

ほかには、「私に何か憑いていますか？」という相談が寄せられる場合もある。そのような相談に、彼が自宅で応じることはあまりない。相談者や現場を訪ねるのがほとんどである。宮古島では通常、旧知のユタに依頼するのが常で、まだまだ無名なYJさんへの相談依頼はそれほど多くはな

いという。

12年ほど前に見た夢では、小さな神社が出てきて、神主に名前を書かされた。以来、さまざまな御嶽の神が夢に出てくるようになった。YJさんにとって、夢も知らせにほかならず、そのような知らせが来れば、当該の御嶽を訪ね、拝むようにしているという。また別の夢では、漲水御嶽の屋根で白い装束を身に纏ったツカサンマ(ツカサ)たちが拝みをしていた。以来、定期的に漲水御嶽を詣で、拝むようにしているのだとか。

あるとき、家から外に出たら、30ほどの霊体が見えた（夢ではない！）。彼が近づくと、霊体たちは退(ひ)いていった。この出来事を、あるユタに話したら、力がついてきた証拠だといわれたという。伊良部在住のこのユタとは、既述のYIさんそのひとだ。

別のあるときには、漲水御嶽の遥拝所で拝んでいたら、その向こうに「光の塊(かたまり)」が一瞬だけ見えた。偶然居合わせた高名なカンカカリャ（彼女はYFさんの姉である）に、それは北（ニヌファ）の神だと教えられた。この教えに導かれて、北にある、佐良浜・大主神社（池間島・ナナムイ御嶽より分祀、加藤2023：18, 82）に拝みにいったところ、ちょんぼり頭（坊主頭に摘み髪）の神を見せられた。なお、ナナムイからのもうひとつの分祀である西原・大主神社では（あるユークイの際に拝みに行った）、大きな女神を見せられたという。

YJさんの祖母はマウガミを上げている。奥様も１回だけ魂を見たことがあるといい、多少の理解はある。少なくとも、頭ごなしに否定はしない。娘さんも幼稚園のころまでは霊を見ていた（中学生になった現在では、見えなくなった）。かくも宮古島という空間は霊的存在に溢(あふ)れ、それを容認するのであり、だからこそ、シャーマニズムが胚胎(はいたい)するのだろう。

写真７　漲水御嶽・拝殿

２．ツカサンマ

（１）TFさん

TFさん（83歳・女性）は、漲水御嶽（写真７）のツカサを務めている。婚家は同御嶽（別名：司屋（ツカサヤー）、宮古島市教育委員会2018：562）を所有する家筋である。そこの長男に嫁したTFさんは、義母からツカサを受け継いだ格好だ。彼女で５代目となる。漲水御嶽の神役組織は本来、３人体制である。西里と下里の２つの内会（佐々木伸一 1983：101）から、それぞれツカサ（西里）、ツカサ・ユーザス（下里）が選ばれて、祭祀を執り行なう。ところが現在、下里のツカサ・ユーザスは不在であり、TFさんひとりで、祭祀を切り盛りしなければならない。

TFさんは、生まれも育ちも宮古島である。農家に生まれ、経済的なゆとりなどなかった。だから、大学進学は諦め、２年間、本島・那覇で貿易関係の仕事に就いた。その後、宮古島に戻り、ほどなくして、結婚する。22歳のときであったという。そのとき、義母は漲水御嶽のツカサを務めていたが、地域の年配のおばあちゃんたち(「神のおばあちゃん」、７～８名）が手伝ってくれ、祭祀を盛り立ててくれていた。なかには、保良や多良間島からも手伝いに駆けつけてくれ、祭祀は恙（つつが）なく挙行されていた。TFさんの出る幕はなく、むしろ、家業（せともの屋）を手伝うことが優先された。「お手伝いの方も多くいらっしゃるから、こちらは大丈夫。あなたはお店の方を加勢してちょうだい」というのが義母の考えであった。

そして時は流れ、TFさんが54歳のとき、義母が亡くなられ、ツカサを継承することに。でも、３年ほどは喪に服さなければならない。不幸が出た家の者は、お祈りができない。これは「神様の決まり」なのだ。結局、57歳になって、正式にツカサに就任した。なお、この３年間は、西里の

ツカサは空席となり、下里のツカサ・ユーザス（ツカサの補佐役）によって、御嶽祭祀はつづけられた。

生前、義母は何も教えてくれなかった。だから就任後、やり方（作法）や「お供物（そなえもの）」の準備について、下里のツカサや関係者に教わるしかなかったが、みな、懇切丁寧に教えてくれたという。

正式にツカサとなり、拝殿内の「大香炉」（宮古島市教育委員会 2018：563，写真３，図１）の前に「座る」ためには、マウガミをお供する必要がある（佐々木伸一 1988：163）。TFさんは義母が鬼籍に入られたタイミングで、マウガミをお供し、ツカサ就任に備えたという。マウガミのお供には、カンカカリャの助けを請うた。そのカンカカリャのお陰でツカサになれたと感謝しきりで、いまでも、お歳暮を欠かさず、祭祀で献上された酒もそのカンカカリャに謹呈しているという。かくも、ツカサとカンカカリャの距離は近い。そこに区別はあれど、差別はない。加えて、御嶽や拝所にも巡拝したが、彼女はこれを神開き（齋藤 2022a：116）だとは認識していない（神開きという言葉を知らなかった）。

西里のツカサは代々、TFさんの婚家、その長男の嫁によって受け継がれていく。つまりは、家筋継承となり、だから、TFさんには神ダーリが認められない。一方で、下里のツカサ・ユーザスは神籤（くじ）で選ばれるという。候補者の氏名を認（したた）めた紙片を丸めて盆に載せる。ここまでは池間島と同じだが（後述）、下里の場合、３回落ちたひとが当選となる。「神籤を降ろして」神に選ばれたひとでなければ、ツカサ・ユーザスにはなれない（「座ってはいけない」）とされる。同席してくれた義理の娘さん（TFさんの長男の嫁で、つぎのツカサ）によれば、ユーザスはカンカカリャであり、だから、見える。逆に、カンカカリャではないTFさんは見えないし、神の声も聞こえない。しかし、カンカカリャはどんなに見えても、ツカサになるという一線を超えることはなく、あくまでツカサの補佐役に徹するというのが、彼女の認識である。

なお、ユークイ祭祀などでは両内会（西里・下里）からそれぞれ「神女

ツカサ」（宮古島教育委員会 2018：563）が輩出されるという。西里のツカサにはその長男のお嫁さんが、下里のツカサにはユーザス（豊穣の祈願役）が、それぞれ手伝うとされる。往時の状況とピタリと重なってこよう。

彼女は気にかかる夢を見ることがあって、そんなときは、懇意にしているカンカカリャに相談するという。この長年の付き合いがあるカンカカリャは、長男の嫁の母親だ。もちろん、個人的な付き合いのなかで縁談がまとまるのは、めずらしいことではあるまい。ただしこのケースでは、巫者の娘が司祭になっていくのだ。巫者と司祭が分かち難（がた）く絡み合い、共鳴し、シャーマニズムという芳醇（ほうじゅん）な伝統を紡いでいるかのようだ。

このカンカカリャについて、簡単に紹介しておこう。彼女は30歳を過ぎてから、本格的に活動を開始した。TFさんの義娘（次期ツカサ）が幼少のころ、当時家族は伊良部島に居住していたが、自宅には早朝から相談者が長蛇の列をつくっていたという。相談者は「線香代」を包んでいった。娘さんは、幼ないながらも、お茶を出すなどして、接客していた。

同カンカカリャの「神触（カンブレ）れ」（神ダーリ）は激しかったという。まずは夢によって神に選ばれたことを知らされ、その後、亡くなった叔母が御嶽に入っていくのを見て、体調不良に陥った。しばらくは巫病に苦しめられたが、開き直り、「どうせなら、強い力を与えてほしい」と神に願うと、その通りに、よりはっきりと見えるようになった。これを聞きつけた近所の神高い「おばあ」（カンカカリャではない？）がやって来て、線香の「数え方」を指南してくれたという。32歳のときの出来事であった[17]。あまりにも力があり（霊感が強く）、葬儀に参列すると、憑依され、しばしば失神したといったエピソードにも事欠かない。

閑話休題。

最終的に57歳のとき、TFさんは義母からツカサを受け継いだが、以来、豊年、豊作、豊漁、健康願い、安全祈願など、祭祀の中心に屹立（きつりつ）している。漲水御嶽では、５月の龍宮アキマンツニガイ（願い、写真８）と秋のユークイ（五穀豊穣祈願）が二大祭祀となっている。ほかにも、オリンピッ

ク・パラリンピックの際には、市役所と合同で安全祈願を行ない、また、海開きや海神祭（ハーリー）、ひいてはトライアスロンなど、さまざまなイベントの安全祈願にも、彼女はひっぱりだこだ。

さまざまな願いの日取りも、TFさんの大切な職務である。たとえば、ユークイは甲寅（きのえとら）の日を慎重に選ばなければならない。その際には、『神社暦』を参照するという。一方で、供物の準備などもあるので、余裕を持って日取りをし、またその情報は事前に新聞や宮古テレビに伝えられ、広く告知されるのだという。

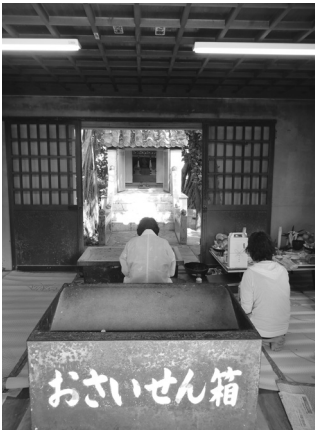

写真８　龍宮アキマンツニガイ
願いにて拝むTFさん
手前右側は参拝者

ツカサになると、個人相談に応じるのは厳に慎まなければならない。この配慮は、カンカカリャがツカサになることを控えるという遠慮と、互酬の関係にあるように思われる。さらにツカサはあくまで一箇所の御嶽の専属であり、ほかの御嶽で拝むのは自粛（じしゅく）すべきだとTFさんは考えている。かたやで、商売をはじめるが、いつにしたらよいかという相談に応じたことはあるという。本人の認識では、それはあくまで日取りであり、日取りであれば応対してよいのだ。すでに触れたように、家業はせともの屋（のちに土産物屋に業態を変え、さらに現在では高齢のため手伝っていない）である。結納品などを購入しに来た客に、日取りを相談されては、無下にもできまい。すべてボランティアで応じていたという。

願いに際し、「宮古トーガニ」と呼ばれる民謡（祝い歌）を唱ずるが、これはウクイ（神唄）・カングイ（神の声）の類（たぐい）ではない。つまりは、神憑り・憑依をしないのであって、カンカカリャの職能を果たすにはいたっていないのである。

御嶽の清掃や修繕、賽銭管理などは、奉賛会が請け負ってくれている。

奉賛会は近隣７部落から、教職経験者などが選ばれるという。歴史に明るくなければ、務まらないと考えられているのだ。近くの阿津真間（あつまま）御嶽などは、奉賛会がない。そのため、荒れるに任せ、修繕もままならない。御嶽の運営にあたって、奉賛会の必要性は疑う余地もないが、それでも、たとえば賽銭箱を開けるときなどは、TFさんが拝み、神の許しを得てからでないと解錠できないという。修繕工事なども同様で、彼女が日取りをし、塩・酒を供献し、線香を焚いて、作業員とともに拝んでから、着工となる。御嶽の毎日の清掃については、担当者に賃金を支払っているが、それも、奉賛会が負担してくれるのである。

（２）TGさん

TGさん（58歳・女性）は現在、池間島・ナナムイ御嶽（写真９）の神役を務めている。内地・大阪に生まれ育った、生粋の関西人だ。大阪に働きに出ていた池間島出身のご主人とは、18歳のころに出会い、20歳で結婚。以降、36年間、大阪で暮らしたが、子どもが独立したのを機に、ご主人が帰島を決断し（「生まれ育った島に帰りたい」）、TGさんが54歳のとき、池間島に移住した。義父母が亡くなって空いていた実家に暮らしつつ、現在、夫婦で観光業を営んでいる。

写真９　ナナムイ御嶽・入口の鳥居

池間島に来てからは、自治会に加入し、村の祭祀を経験してきた。「シマの動きを見ながら、勉強させてもらった」のである。以前にも、孫を見せに池間には来島していたので、ツカサの存在は知っていた。行事では、踊りに参加したり、ツカサの姿も遠巻きに眺めていたが、どこか異文化として、とらえていたという。最終的に彼女はツカサンマとなるが、就任以前には、その詳細をまったく知らなかったという。

ナナムイ御嶽の神役組織は本来、５人体制である。すなわち、①フズカサンマ(ウフンマ、大司、大母)、②アーグシャー(カカランマ、アーグ(歌)を歌う)、③ナカンマ（中母、祭祀を円滑に運ぶ)、④アニンマ（ツカサのお供の姉役)、⑤ウトゥガマンマ（ツカサのお供の妹役）の５役となる。この５名は、ツカサンマと総称される[18]。YGさんが紹介してくれた西原の神役構成と酷似していよう。それもそのはず、YIさんのところで触れたように、西原・大主神社は、池間・ナナムイからの分祀であり、これは分村を意味する(上原 2017：19)。月日とともに若干の齟齬(そご)は生まれようとも、基本構造の共通性は一定程度、温存されていて然(しか)るべきであろう。

選定の方法はつぎの通り。まずは、数えで52～55歳の女性が候補者となる[19]。氏名を書いて丸めた紙を盆に載せ、自治会長がこれを揺らす。すると、紙が落ちるが、そこに書かれた名前をカウントしていく。最初に７回落ちた候補者がフズカサンマ、次に７回落ちた者がアーグシャー、といった手順で、５名を選び出すのである（加藤 2023：49-50，野口 1972：216)。「ンマユイ（母選り)」と呼ばれ、いわゆる神籤ということになるだろう[20]。順番は、神役組織における序列に相応していると考えて、大過あるまい。

しかし、ンマユイは長く途絶えていた。神籤で選ばれても、仕事や生活を理由に辞退する候補者があとを絶たず、神役不在の状態に陥っていたのだ。復活を期した現在の自治会長は、候補者の年齢制限を広げ、行事を減らし、さらには、ツカサンマを５名から３名に絞り込んだ[21]。さらにさらに、事前に入念な根回し(説得)も行なって、ようやく、フズカサンマ、アーグシャー（カカランマ)、ナカンマを新たに選出できたのである。そしてTGさんは、ナカンマに選ばれている。当然、ンマユイ（神籤）の前に、自治会長から意思確認があった。彼女は、選ばれたら受諾する意向を示したという。

何故か？

TGさんは池間島に来てからというもの、体調を崩すことが増えた。

朝、起きれず、そのまま２日ほど寝込むこともあった。車を運転していても、急に気分が悪くなったりした。吐き気を催すことも。考えも変化し、見えるようにもなった。これらが、神ダーリであったかどうか、本人には定かではなかったし、自分から口に出すのも憚(はばか)られた。分かってくれるひともいるだろうが、否定されたとて不思議なかろう。何せ、かつては自分自身が否定寄りであったのだから。しばらくすると、「何かが入ってくるのも分かるし、抜けていくのも分かる」ようにもなったのだとか。「神籤で選ばれることは神に選ばれることであって、それを辞退することなど、神が許さないだろう」。そんな価値観が、いつしか、彼女の裡(うち)に芽生えたのである[22]。

ンマユイのとき、TGさんは役員（運営委員）を務めていたので、同席を許されたという。傍(かたわら)に控え、神籤が落ちた回数を数える係であった。自治会長が実際に籤を引くのを、間近で眺めていたのだ。候補者の数などが、事前に知らされることはなく、まさに会長のみぞ知るという状況であったらしい。最高位のフズカサンマに選ばれていたら、引き受けるつもりだったというから、彼女の決意のほどが窺われよう。

ナカンマとなって最初の「１年生」のときには、体調不良が改善することはなかった。逆に、願い(ニガイ)をするたびに、体調を崩していたという。半年ほどすると、「徐々に身体が慣れた」が、TGさんはこれを、「神様が受け容れてくれた」と解釈するのである。確たる正解があるわけでもなく、これで大丈夫なのかという不安がつきまとうが、選ばれてよかったと彼女は考えている。３名のツカサンマのうち、１名（カカランマ、TGさんはカカラと呼んでいた）が辞めてしまい[23]、現在はフズカサンマと２人で祭祀を切り盛りしている。そんなとき、同僚のフズカサンマとは「ナナムイ（御嶽）に入っていると、落ち着くねぇ」と話しているという。「やっぱりいいなぁと思う」。そんな感慨が、口を衝(つ)く。

フズカサンマ・カカランマ・ナカンマの職分は厳格に区別されている。三者は、それぞれを経験した先輩から別々に指導・教育を受ける。池間島

のナカンマ経験者は現在２名だという。「信じ事」の供物を準備し、献じるのが、ナカンマの役割だ（真下 2003：194）。TGさんは先輩２名の指導を仰ぎ、準備に勤(いそ)しむ。就任以前、彼女は詳細を知らず、就任後、先輩から教わりながら、少しずつ理解していったという。ナカンマにはナカンマの、受け継がれてきたノート（メモ書き）があり（野口 1972：216）、それを頼りに話し合いながら、準備を進めるのである。供物はそのひとつひとつに意味があるから、何ひとつ欠かすことは許されず、並べ方も間違えてはならない。だから、極度の緊張を強いられるが、いざ祭祀の場で迷ったときには、フズカサンマと相談して進めるという。「あーだよね、こーだよね、神様はどう思うかな？」と、常に「神様主体」で祭祀に臨む姿勢が貫かれている。

ところで、既述のように、現在、カカランマは空席であるが、だからといって、祭祀催行に際して、その職域を欠かすことはできない。最高位のフズカサンマが、第２位のカカランマを代行しているという。何故なら、第３位のナカンマが、より上位の職責を担うことは許されていないからである。

ここで、カカランマに目を向けよう。祭祀において、カカランマ（アーグシャー）には、「カンカカリヌアーグ」を謡い、神憑りすることが求められる（加藤 2023：66）。神籤で選ばれた若いカカランマにとっては、さぞやプレッシャーだっただろう。それでも、新任のカカランマは経験者の指導を仰ぎつつ、懸命にその職務（神憑り）に向き合った。歌うので精一杯で、方言（発音）も難しい。新任カカランマもたいへん苦労していたというが、辞める直前には、それなりに職責を果たしていた。側(はた)（TGさん）から見ても、感触を掴(つか)みはじめていたようなのだ。この語りは、「カカランマは、神々の名を崇めながら、神歌を歌い、神々と対話するなかで、見えなかったものが見え、聞こえなかったことが聞こえるようになっていく」（加藤 2023：89）との指摘によく合致する。あるいは、厳粛なナナムイの空気が、真摯に勤める者を憑依へと誘(いざな)うのかも知れない。

このように、カカランマは、憑からなければならないが、憑かるひとが選ばれるとは限らない。ユタやムヌスーが選ばれれば問題はないが、そうでないひとが選ばれた場合、ユタ・ムヌスーの助力を仰ぎながら、職務をこなしていたという。TGさん自身、アドヴァイスをもらうことがあるが、それは、神意（神様が何をいっているのか）を確認するためだ[24]。

もともと47あった願い（ニガイ）（祭祀）は現在、10ほどに整理された。それでも、月一回のペースであって、仕事を抱える身としては、決して楽ではない。それを、大阪出身のTGさんがこなしているのである。部落(地域社会)が彼女を受け容れ、また、彼女も部落に溶け込んだ証（あかし）だろう。

ナカンマ就任にあたっては、神開きなどの儀礼は行なっておらず、マウガミも上げていない。簡単な引き継ぎのみで、特別なことはしていないという[25]。ごくごく自然体で、願いがはじまったのである。

御嶽での願いにカンカカリャやユタが関わることはあるという。「たまに、願い（ニガイ）のときにご一緒する」。でもそれは年に１～２回ほどだ。自身のやり方で、ツカサンマからは少し離れた場所から願いをするが（遠慮があるのだろう）、このとき、カンカカリャは白い着物を身に着けているという。たとえばユークイでは、ツカサンマ３名全員が白い着物に身を包むが、通常の願いではフズカサンマのみが白い着物を羽織ることを許され、カカランマ・ナカンマは普通の着物(柄あり)を纏う。白い装束はやはり、神聖なものであり、一定の規制をともなうといえよう。

願いの基本的な構成は、口上、歌謡、供献、線香となる。とりわけ「線香がないと願い（ニガイ）ははじまらない」。線香を通して、神様に告げるのである。それが、TGさんの認識である。祭祀によって、焚くべき線香の本数は異なるという。願いは基本、８：00から12：00までの半日で終わる。ツカサンマの負担軽減を第一に考えて、自治会長の判断で短縮されたのである。ただし、ユークイのクムイ（籠り、加藤 2023：53）は継承されており、ナナムイで一晩を明かす。

ナナムイには、白砂を盛ったウドゥヌが設置され、146もの香炉が埋め

込まれている。フズカサンマ・カカランマ・ナカンマの領域に分かれ、それぞれの先達の香炉が所狭しと並ぶ（加藤 2023：61，63）。それぞれがそれぞれの領域の香炉しか触ることができないし、触ってはいけないとされる。各々の願いのためにナナムイに入ると（祭祀のときしかナナムイには入れない）、まずは、これら香炉の掃除から手を着ける。香炉のなかの白砂を新しいものに入れ替えるのだという。

56歳になる直前のタイミングで、TGさんはナカンマとなった。この55～60歳という時期は、閉経し（齋藤 2023a：50）、子育てからも解放され、夫にも理解力が出てくる。かといって、たとえばナカンマは荷物（供物）も担がなければならず、あまりに高齢だと体力的に厳しい。ツカサンマになるのには適したタイミングであり、「意味がある」。そのようにTGさんは考えている。

なお、義父が亡くなったとき、帰省して葬儀に参列している。仏式の葬儀であったが、その際、ムヌスーを呼んで、口寄せをしたという[26]。故人のメッセージを聞かされたが、それは「靴がない」という他愛（たあい）のない内容であった。また、実はご主人の祖母はムヌスーであったという。ムヌスーの祖母は報酬の一部を小遣いとして、かわいい孫に与えていたそうである。そんなご主人にとって、内地出身の妻がナカンマに選ばれたのは驚きであったとしても、想定内だったのだろう。かくて、シャーマニズムの雰囲気が濃厚に醸成（じょうせい）されていったのではあるまいか？

3．若干の考察

（1）カンカカリャについて

本稿で紹介した5名のカンカカリャたちはみな、比較的重篤（じゅうとく）な神ダーリ（巫病）に悩まされており、典型的な「ウマレユタ」（佐々木宏幹 1980：101）だと評価できる。YFさんは神憑りへの強いこだわりを口にし、神歌によって神憑りを果たす。さらには日取り（齋藤 2022a：109-110）という形で、部落祭祀に関わってもいる。YGさんも神歌を唱じ、神霊と交信

する。母親はムヌスーであり、職能を継承した格好だ。彼女にはナカバイを務めた経歴もあって、部落祭祀との関わりは浅からぬものがある。YHさんは代々、カンカカリャとツカサを兼務する家筋に生まれ、文字通りの「巫者＝司祭」だ。主宰するウプムイ御嶽は地域密着型で、その祭祀には、親戚縁者が駆けつける。血縁集団（大本 1983：89-90）の司祭という意味合いが強いようだ。YIさんの語りからは、神歌というフレーズが聞こえてくることがなかった。透視・幻視を旨とし、巫者的性格が目立っている。廃れた御嶽の管理を率先して引き受ける一方で、自分が表に立つのは差し控えており、ツカサに対する遠慮は隠しようがない。やはり、巫者としての立場を弁（わきま）えているのである。YJさんは透視を得意とする典型的なユタで、YIさんに近いだろうか。未成仏霊の鎮魂のためなら、御嶽のみならず、寺院にまで積極的に足を運び、真摯に祈りを捧げる。そこには屈託が微塵（みじん）もない。「司祭か？巫者か？」などといった「二分論」（佐々木宏幹 1991：371）や「二区分論」（赤嶺 1997：147）など、彼にとってはどこ吹く風だ。

巫者５名の語りから注目されるのは、カンカカリャ（巫者）と部落祭祀の関係性だろう。YFさんは日取りをし、YGさんは神役を務め、YHさんはツカサそのものだ。すでに言及したように、石垣島においては、司祭と巫者を兼務する事例こそあれ、それぞれの活動は峻別（しゅんべつ）され、切り離されていた（齋藤 2022a：115-119，2022b：60-66）。ところが宮古諸島では、総じて、境界が曖昧（あいまい）なのである。こうした状況は、「カンカカリャは日常的には卜占、判示、呪的儀礼を担当しているが、部落祭祀においてはユーザスを務める」（大本 1983：93）との描写とよく合致しているように思われる（ユーザスの多くは神憑る巫者である、佐々木伸一 1988：151）。宮古諸島ではまさに、神憑る巫者の介在なくしては、部落祭祀は完結し得ないのである（佐々木伸一 1983：99）。

こうした価値観が、カンカカリャによって惹起（じゃっき）・醸成されたと考えるのは適当ではあるまい。たとえば、神役の候補になる条件は部落ごとに多様

だが、数十年前までは「神がかり」という能力が第一の条件であった。何故なら、「神がかれる者が神役達の中に１人は必要で、そのような者がいなければ、カンニガイはできない」（佐々木伸一 1983：101）からである。つまり、部落祭祀においては、神との直接的交流こそが尊（たっと）ばれ、カンカカリャの憑依能力は不可欠なものと見做された。何故か？　それこそが、「民衆の、もっとも望んでいる宗教的ニーズ」（櫻井 1979：128）であったからにほかならない。狩俣のウヤガン（祖霊祭）では神役が「延々と神謡（フサ）を唱する」（金子 2022：23）が、これにより、「祖霊神がミャーク（現集落）に直接顕現してフサ（神謡）を唱し、ムラとムラ人に幸をもたらす」（傍点筆者、金子 2022：24）と考えられた。そうなのだ。幸福をもたらしてくれるのは、司祭そのひとではなく、神々なのである。ひとびとが、「神憑り性」（櫻井 1979：121）というシャーマニックな能力を渇望したのも、無理からぬことであった。

「ユタに対して、島の人々はその成巫過程をよく知悉しているので、呪術者としてのユタに一種の畏敬の感をいだいている反面、普通の人々とは区別された存在としての違和感をいだいているのも否定できない」（山下 1977：30）との指摘は、的を射ていよう。「宗教的優位」と「政治的劣位」は背中合わせなのであって（山口 1982：171，2000：258-260）、ユタは能力が高ければ高いほど、「淫祀邪教」（櫻井 1979：110）のレッテルを貼られてしまうのだ。宮古島ではしかし、それほどの「上下への分化」（佐々木宏幹 1980：148）を確認できない。つまり、「未分化」なのである。先行研究に依拠すれば、「文明の中心から遠く離れた地域に住む無文字社会」ほど、「平地民族」よりは「山地民族」のほうが、現在よりは過去のほうが、未分化である傾向が強い（佐々木宏幹 1980：146-147）。もちろん、宮古諸島は無文字社会などではない。それでも、琉球弧にあっては、中心・那覇（首里）から遠く離れた僻地（へきち）であるのは、否定しようがない。かような地理的条件のもとで、巫者と司祭が未分化であるという実態が観取されたのは、とても示唆に富もう。そのように考えずには、いられない。

（2）ツカサンマについて

漲水御嶽のTFさんは、家筋継承のツカサである。継承時のマウガミのお供では、カンカカリャの助けを借りている。また、彼女には親交の長い（別の）カンカカリャもおり、しばしば相談を持ちかける間柄だ（そのカンカカリャの娘が長男の嫁であり、つぎのツカサとなる）。ともかくカンカカリャとの関係は親密で、良好だ。排除する姿勢は微塵（みじん）も感じられない。とはいえ、彼女が神憑ることはなく、個人相談への対応も厳に慎んでいる。ツカサとしてはカンカカリャと距離を置きつつも、プライベートでの親しい交流には躊躇（ためら）いがない。こうしたスタンスが彼女独自のものであるかといえば、さに非（あら）ず。現在は不在となっているものの、下里内会からはツカサに加え、ユーザス（巫者）が選ばれ、祭祀では香炉前に陣取っていた（宮古島市教育委員会 2018：写真６）。少なくとも漲水御嶽では、巫者への扉は開け放たれていた。一時期とはいえ、YGさんはツカサンマ（ナカバイ）を務め、YHさんは痩せても枯れても、現役のツカサだ。このように、宮古諸島において文字通りの「巫者＝司祭」がしばしば見受けられる事実も、TFさんと巫者の距離感に通じるものがあるだろう。

池間でツカサンマ（ナカンマ）を務めるTGさんは内地出身であり、そんな彼女が部落祭祀を支えているのである。見逃せないのは、神ダーリを経て、見えるようにも、感じるようにもなっている事実。ツカサンマとして祭祀に参加するうちに、巫者的な感覚が研（と）ぎ澄まされていったのである。否（いな）、巫者的な能力を開花させたからこそ、司祭への道が拓（ひら）けたと考えるべきではあるまいか？

宮古諸島ではそもそも、「部落祭祀の年中行事であるカンニガイが、正当な方法で行なわれた否か、誤りがあったとすれば何か、また、ニガイが神に通じているか確認するために、部落の神役達（部落部員が同行する場合もある）が、巫者達に占ってもらっている」（傍点筆者、佐々木伸一 1983：99）のである。「巫者への謝礼金を予算化している」部落もあったというから、巫者を頼るのはごく当たり前の慣行だったと知れる。祭祀

の成否について、司祭たちでさえ、巫者のお墨付きを求めずにはいられなかったのだ。巫者と祭祀の相互補完的な関係性は、一目瞭然だろう。

そもそも、「シャーマンは神霊界と現実的、直接的に交わりうる専門的技術者であり、この技術のゆえに彼は社会の不幸、災害を除去し、幸福繁栄を将来する人物と信じられ、尊崇の対象となり、住民に権威をもって臨むという例が各地にある」（傍点筆者、佐々木宏幹 1983：95）。そうなのだ。ただ神歌を歌うだけでは駄目なのだ[27]。現世利益（げんせりやく）をもたらしてくれないのなら、意味がない。そんな力を持つのは、神を措（お）いてほかにはない。かくて神の降臨は必須とされ、そこで、依代たるシャーマニックな巫者の登壇となるわけだ[28]。

ここで少し長い引用をしなければならない。「沖縄本島においては、かつてシマとかマキョと呼ばれる村ごとに総本家となるニイドゥクル（根所）があり、その主人であるニンチュ（根人）の姉妹がニイガン（根神）といわれてニンチュの村落支配を助けてきた。８、９世紀頃になると、村々を併合した郡程度の鎮域を統括するアンジ（按司）が出現する。彼の姉妹や妻はノロ（祝女）と呼ばれた。ニイガンもノロも神がかりして、前者は村レベルの、後者は郡レベルの人々の生活に指針を与えた。これらシャーマニックな女性の活動なくしては、ニンチュやアンジの統治も完全たりえなかった。＜中略＞後になると、ニイガンやノロはシャーマン的性格を失って祭司化し、シャーマン的機能はユタと呼ばれる女性に移っていく。＜中略＞国家統一と中央集権化に伴って、シャーマン的側面または性格は下降し拡散してゆき、他方祭司的側面は上昇して制度化されたのである」（傍点筆者、佐々木宏幹 1983：100-101）。つまり、Ⅰ．根人と根神の二重主権体制、Ⅱ．按司と祝女の二重主権体制、Ⅲ．司祭制度の確立（管制下に取り込むことで、巫者本来の神憑り性を形骸化した、櫻井 1979：121）という経緯で、シャーマン的機能がユタへと委譲されたものと想定され、これは鳥越憲三郎の見解とも矛盾していない（鳥越 1971：223-229）。

かたや宮古諸島では、神役組織の裡（うち）にシャーマニックな巫者（女性）が

包摂されたままであり、司祭は巫者の参加を歓迎しつつ（両義性）、巫者も司祭に対する敬意や遠慮を忘れない（周縁性、齋藤 2023a：62）。宮古特有のこうした状況は、上記Ⅰないし Ⅱの段階を彷彿させないだろうか？否、神役組織の制度化という奔流は、離島までをも洗い流すにはいたらなかったのか？　信仰の古層を垣間見たように感じるのは、何も、筆者だけはあるまい（齋藤 2022b：86）。

（3）神役組織について、あるいは、カカランマについて

新米ツカサンマであるTGさんの語りからは、巫者的能力に長けた（つまりは憑依能力のある）カカランマの重要性が色鮮やかに浮かび上がる。嫌が応にも、目が向いてしまう。憑依に対するピュアな憧憬の念は、YFさん、YGさん、YHさんの語りからも窺い知ることができる。つまり、形式化・形骸化されたはずの祭祀において神憑りの要素が強く求められているのだが、神役の神憑りをめぐっては「共同体や国家が形式化された形ではあってもなお神の憑依と託宣の必要を認める限りにおいて、それは下級神女が担うことになった」（傍点筆者、赤嶺 2006：410）とされてきた。司祭がシャーマニックな活動に手を染める事例は少なくないが、それでも、それは下級神役に限られ、最高位神役であるツカサやノロによる憑依行動が稀有であることは前稿でも確認された（cf. 櫻井 1979：127-128, 大本 1983：93, 高梨 1989：30, 塩月 2012：227-228, 渋谷 1992：373-374, 赤嶺 1997：156）。つまり、ユタによる完全統御を、神役組織はギリギリのところで拒んでいるように見受けられるのだ（齋藤 2022a：123-128）。対して、本稿紹介のカカランマは神役組織の第２位を占めており、最高位さえうかがう勢いである。これでは、とてもではないが、下級神女などとは考えられない。

先行諸研究との乖離を、如何に理解すればよいのだろうか？

神役組織において、どのような地位を与えられた神役が神憑りするのかといえば、宮古諸島・大神島では５名のうち上位３名が神憑かりする（鎌

田 1965a：393)。大浦では11名の神役がいるが、その上位２名が神憑る（鎌田 1965a：399)。保良では、３名の神役には、いずれも神憑りした者が就任する（鎌田 1965a：403)。与那覇では、３名中の第３位のクムィザスがカムカカリャとも呼ばれ（鎌田 1965a：405)、神憑りするものと想像される。比嘉では、３名のツカサの脇を６名のカンカカリャ（ヤーザス）が固める格好だ（鎌田 1965a：409-410)。宮国の神役組織は（１）ユーザス、（２）ツカサ、（３）ミズノヌス、（４）リューグウザスで構成される（鎌田 1965a：410-411)。特筆するべきは、巫者と目されるユーザス（大本 1983：94）がツカサよりも上位に位置づけられている点だ。かつてはツカサが最高位を占めたが、「今はユーザスの方が偉いと思う村人が多く、正月の供物もユーザスの方に持ってゆく人がある」（鎌田 1965a：411）のだとか。また別の報告でも、「（宮国では）ユーザスは供物と線香を司り、祝詞を唱えて祈願するなど、主導的役割を果たす」（傍点筆者、宮古島市教育委員会 2018：29）とある。神憑りする巫者の神役組織に占める地位が、総じて高いのは明々白々で、司祭を凌ぐ事例さえあるのだ。

巫者が司祭を凌駕（りょうが）する事態は、宮古島、松原・久貝でも認められる。両部落の神役組織はユーザス１名、ツカサ１名、ツカサトゥム２名、男性神役ガンザ１名で構成される（真下 2003：174)。祭祀において「神がかりして神のことばを発するのがユーザスの役割」だとされ（真下 2003：175)、「ユーザスが神事のなかで神々の名をよみあげるとそれらの神霊が次々に憑依してき、まず名告りをして１年の農作や漁業の豊凶、村人の健康などについてのカングイ（神声）がユーザスの口から発せられるという。ユーザスはこのとき深いトランス状態にあってどんなことばが発せられたか記憶にないとのことである」（真下 2003：175)。また「（松原・久貝では）ユーザス（カンカカリャ）が神役組織の中心とされ、ツカサはそれを補佐する役割を担っていると考えられている。ここでは、神事の全体的な執行も神がかりするユーザスが統括しているのである」（真下 2003：175）という。もはや、下級神女どころではない。「巫者＝司祭」をも易々

と飛び越えて、「巫者＞司祭」という領域にまで足を踏み入れているのだ。われわれは、認めざるを得ぬ。憑依するカカランマを下級神女と表現するのは、少なくとも宮古諸島では、完全な誤謬である、と[29]。そして、司祭が自らの意志で膝を屈したとは考え難かろう。神憑る者に与えられた地位を思えば、憑依を渇望する住民感情があったればこそ、「巫者＞司祭」という局面が出来したと考えるべきだ（内田 1999：30）[30]。

文字通りの管見の限り、奄美大島でも類似の事例を認め得る。「大和村今里のノロの呪詞はユタからの教示によるものであって、さらにこの呪詞は大和村国直のノロにも教示されてノートされていたものであった」（山下 1977：68）。奄美でも、神憑り性を手放した骨抜きの神女（櫻井 1979：121）は、神憑るユタに縋るほかなかったようなのだ。また、「1976年現在、薩川におけるノロの神まつりはユタによって指導されている」（山下 1977：68）ともあり、宮古島にて認められた司祭と巫者の「逆転現象」を確認できるのである。さらに、奄美諸島・悪石島の女性神役はホンネーシ１名と浜のネーシ１名であるが、「昔からミクジで決める。ミクジで決定しても神がかりしなければならない」（傍点筆者、山下 1977：69）。つまり、神役になるには憑依能力が必須の要件なのであり、これでは、公的祭祀から巫者を排除するなど、到底望むべくもない。

加えて、奄美大島では、ユタのみならず、ノロまでが弾圧を受けた痕跡がある。薩摩藩による申し渡しでは、「（ノロが）神にかかるといって米雑穀を浪費し、徒党を組んで怪奇なる儀をするのを禁ずる旨」（山下 1977：39）が述べられているという。司祭制度が手厚く保護された一方（櫻井 1973：９）、「ユタ刈り」（櫻井 1973：５）や「ユタ征伐」（櫻井 1973：６）という嵐が吹き荒れたのは、夙に知られている。にもかかわらず、奄美大島ではノロ（司祭）までが抑圧の憂き目にあっている。何故か？ それは、件のノロが「神がかった」からにほかならない。制度では制御し難い憑依こそを、薩摩藩は警戒したのである。

かくも、憑依は圧倒的な影響力を持つ。宮古諸島の神役組織はそのこと

を、われわれに語りかけてくれているのである。

中心と周縁のシャーマニズム：むすびにかえて

佐々木宏幹は、司祭と巫者について、つぎのように対比させ、整理した（佐々木 1983：94）。すなわち、司祭は世襲（学習）・保守・優位、巫者は獲得（召命）・革新・劣位という特徴によって意味づけられ、「対置」（山口 2000：258）されるのである。とりわけ、司祭＝優位、巫者＝劣位という対置のさせ方は、文化人類学における「中心と周縁」（山口 2000：247）の理論を思い起こさせる。同理論をシャーマニズムに重ね合わせてみると、どうなるだろうか？　中心は排除・差異性、周縁は内包・等質性という特徴を帯びるという（山口 2000：258-259）。差異性が格差を、等質性が平等を、それぞれ招来するのは想像に難くあるまい。だからこそ、中心を占める司祭は神役組織を構築し、序列を決めたがる（だからこそ、下級神女という立ち位置が生じる）。かたや、周縁の巫者は格差・序列を嫌い、それゆえ、組織をつくらないのだろう。以上をまとめれば、つぎのようになる（表１）。

表１ 対置される司祭（中心）と巫者（周縁）

司祭	世襲	学習	保守	優位	中心	秩序	排除	差異性	格差
巫者	獲得	召命	革新	劣位	周縁	無秩序	内包	均質性	平等

司祭は、世襲によって秩序（安定・保守）の維持を最優先する。不確実な召命（巫病・神憑り）などは忌避し、家筋・血筋こそを重んじる所以である。「淫祀邪教」（櫻井 1979：109-110）のレッテルを貼るのは、対極的な巫者を劣位に貶めるためだ。「政治的な行為とは「中心」に近づくための演技の束である」（山口 2000：247）。政治に絡め取られてしまえば、中心を志向せざるを得ぬ。社会とは、そういうものだ。ごく一部の未開社会・非文明社会を除けば、こうした潮流（それは奔流でさえある）と無縁でいられる場所など、存在はしまい。「神憑りの下級神役への委譲」はむ

しろ、ありふれた現象ともいえる。

しかしながら、秩序（中心）は、無秩序（周縁）を可視化しておかないと、保持され難い（山口 1982：171）。「周縁」の創出と強調こそが不可欠なのだ（傍点筆者、山口 2000：247）。排除の対象とされる周縁は、逆説的に、存続を期待される（しかも、目の届くところに）。期待するのは、もちろん、社会そのものである。司祭システムが滅亡の危機に瀕している一方で（松本 1969：５，岡谷 2019：13）、ユタ信仰は「再活性化、増加」（塩月 2011：表１）さえしているという。社会に望まれなければ、再活性化・増加など覚束ない。周縁はその内包性を遺憾なく発揮して、両義性を手に入れたのである（齋藤 2023a：66-67）。ここに、「包摂力」のようなものを嗅ぎ分けるのは、容易い。

翻って、宮古諸島の状況だ。

巫者と司祭が未分化であるという事象は、どうしても、中心と周縁の未分化として映じる。なるほど、宮古諸島でも神役組織は存在する。しかし、本来削ぎ落とすべき神憑り性（予想がつかないという点で、それは革新的だ）は温存され、排除するべき巫者（＝周縁性）も包摂されたままだ。神役選出も、どうやら、かつては家筋に拠ったようだが、現在では神籤で決めるケースが多い。神籤で選ばれるのは神に選ばれたことと同義で、まさしく召命であり、召命は周縁の特徴のひとつだ。一定の年齢に達した者が候補となるのも、いたって平等で、周縁的といえる。新米神役は先輩から学習（中心的）するというが、巫者（周縁的）への相談も厭わない。つまり、中心的であるべき神役組織が多分に周縁的なままなのであって、これでは、制度化（組織的分化）の進展が不十分であったとて不思議ではない。

同様の状況が、奄美諸島にも認められることは、本稿にて言及しておいた。琉球弧の何処に、このような周縁性が残されているのか？　より深いシャーマニズム理解に向けて、超克するべき研究課題だと思う。ところで、「シャーマニズム・憑依文化を同心円構造でとらえてみると、周辺地域（韓国、沖縄、インドネシア）では、シャーマニズム・憑依文化自体の

多様性が顕著になる」（傍点筆者、嶋田 2011：６）という。多様性が内包性・包摂性と同義であるとするならば、それを、周縁性の残滓（ざんし）と解しても誤りとはいえないと思う。それらを、捨象（しゃしょう）せず丹念に拾い集めていったならば、あるいは、「民俗周圏論的」な「遠方の一致」（宮平 2021：40）を掬（すく）い上げることが叶うかも知れない。

【註】

（１）八重山諸島・黒島では、女性の「ムヌシリ（卜占師）」が知られ、「ウクジ（米粒による卜占）」を行なったとされる（太田 1988：403）。石垣島・白保でも、「ムナシー（物知り）」と呼ばれる「宗教的な専門家」の存在が報告されている（琉球大学社会人類学研究会 1977：354）。ムヌスーは、これらと同様の職能者であると考えられよう。

（２）YFさんによれば、ユタという呼称は琉球方言の「ゆんたく」、すなわち「おしゃべり」からきているものであり、彼はそのニュアンスがあまり好きではないのだ。それでも、彼は時折、ユタと自称することもあって、まったくの拒絶反応を示しているふうでもない。

（３）並外れた資質と性格を持ち、神に選ばれたという自覚のもとに役割を果たすユタは「ウマレユタ」と呼ばれ、「畏敬視」される（佐々木宏幹 1980：101）。対して、「カミダーリィ経験を経ないのに、ユタ通いをしているうちにユタの唱い言やハンジ（判断）、卜占、儀礼などを見よう見まねで学び、一人前のユタであると称して依頼者に応じる人物」は「ナライユタ」だと蔑称されるという。YFさんは生粋のウマレユタになると思う。否、ウマレカンカカリャだ。

（４）同じ宮古島の松原集落では、あるユーザスの成巫にあたり、「カンカカリャー」の判断によって「マウの神（守護神）」が判明したという（真下 2003：176）。大浦では、男性が「マスニンジュ（氏子）」になる場合、ヤーキザスまたはアキザスに依頼して、個人が祀る神を特定するといい、「マウガンをともする」と表現される（鎌田 1965b：184）。また与那覇でも、男女とも20歳近くになって体調が優れなかったり、家庭に不幸がつづくと、モノスの判断を仰ぎつつ、「マウヲカミル」という（鎌田 1965b：193）。個人的に特定の神を信じる形式をとるのだという。かくも、マウ・マウガミ・マウガンという守護神を重んじる考えは、宮古島に通底しているのである。

（５）カミンチュ（神人）は通常、御嶽の公的祭祀に関わるノロやツカサを指す言葉である。しかし、後述するように、宮古島ではユタ（巫者）も公的祭祀において重要な役割を占めており、そのために、YFさんにとってはカンカカリャやユタもカミンチュに含まれるのであろう。

（６）狩俣の祖霊（ウヤガン）祭において、何時間も「神歌」が歌われたとの報告がある（谷川 2019：267）。また同祭祀において、「延々と神謡を唱する」（金子 2022：23）との記録も見られ、参考になろう。

（７）TFさん(後述)が歌う「宮古トーガニ」は、この祝い歌に相当するであろう。ただし、憑依をともなわない祝い歌は、神歌・神声とは本質的に意味合いを異にする点は閑却されてはならない。

（８）宮古島では、「神まつりの日どりその他をきめるピューノシュ」という男性神役が知られている（鎌田 1965a：400)。石垣島・白保で報告された「ピールトル（日を選定する者)」(琉球大学社会人類学研究会 1977：354）も、同様の職能を帯びていたものと推測される。宮古島ならびに石垣島において、同様の神役が知られていた点はとても興味深い。また、この事例を敷衍するなら、日取りをするTFさんは男性神役であると解さざるを得ないだろう。

（９）西原の神役組織について、上原孝三は以下のように紹介している。①ウーンマ(大母)、フずカサ（大司）ともいう、②アーグシャー（謡者)、アーグスンマ（謡をうたう母)・サす（佐司)・ウリザす（降り佐司)・カンカカリャ（神憑る者）ともいう、③ナカバイ(中栄え)、ナカずカサ(中司)ともいう、④ウーンマヌトゥム(大母の供)、⑤アーグシャガトゥム（謡者の供）の５役である（上原 1983：74)。概ね、YGさんの認識と符合しよう。なお、第２位のアーグシャーは神憑りが専門で、かつては部落内の霊的職能者・ムヌすー（物知り）から選ばれていた。西原の「アーグシィンマ」については、別名「カンカカリャ（神懸かる者)」とも呼ばれていたという（上原 2017：23)。なお、同神役は「かつて村落の霊的能力者ムヌシィーから選出されていた。神懸かりが専門であり、祭祀儀礼執行中神懸かり状態になり、カンガカイヌアーグ（神懸かりの歌）を謡った」とされる。

（10）西原のアーグシャーは任期３～４年とされ（上原 1983：74)、佐良浜では３年となっている（上原 2022：218)。YGさんは概ね、標準的な任期を勤め上げたと考えられよう。

（11）宮古島において、ツカサ（司祭）とユーザス（巫者、アーグシャーに相当）には毎年対等の金銭が支給されるが、ツカサにはそれに加えて、年間一石二斗(180kg、筆者補足）の米が支給される事例が知られる（大本 1983：94)。一石二斗を如何に評価するかだが、少なくとも西原の場合、ツカサ(司祭)とユーザス(巫者）の格差はそれほど大きくないと考えるべきであろう。

（12）石垣島の豊年祭では綱引きが有名だが、荷川取の豊年祭では綱引きはせず、供物を分配するだけである。比較的、質素な豊年祭といえよう。親戚縁者をメインの参加者とする内輪の祭祀であるために、小規模なものとなったのであろう。

（13）YFさんやYGさんは神歌を謡うところに特徴があるが、YHさんはあまり謡わず、たまに謡うだけだという。神歌の重要性は共通するものの、どれほど重きを置くかについては、濃淡があるようだ。

（14）同様の感想をYGさんも漏らしており、また、別のカンカカリャ（その方は取材には応じてくれなかった）からも聞かされた。往時の「巫者＝司祭」は今日、存続の岐路に立たされているのかも知れない。

（15）ただしこれ以降も、引っ越したり、内地に行ったりすると、未成仏霊が知らせたくて、YJさんを押さえつけてくること（金縛り）はあったという。

（16）奄美本島南西部には真言系を自称しているユタがおり、般若心教を読経するという（山下 1977：215)。YJさんの言動が、取り立てて突飛なわけではないのだ。なお、読経は「神がかりするための予備的行為であって、結果的には神がかりし

て託宣を述べる」（山下 1977：215）。般若心教の読経は神憑りのきっかけに過ぎず、あくまで本質は神憑りにあるのだろう。

（17）このためか、次期ツカサは母の導きによって、同じく32歳のときにマウガミをお供している。その際、TFさんから白い衣装をプレゼントされたという。なお、宮古島・比嘉では「オタキの神まつりに参加するにはマウガンをともするといって、自分の所属するオタキの神をきめなければならぬが、これは男女ともに25才ぐらいからで、部落のカンカカリャに決めてもらう」（鎌田 1965a：410）という。マウガミのお供は、宮古諸島に広く認められる慣行なのであろう。

（18）この組織形態は、①フズカサンマ（大司）、②アーグシャー（歌謡を謡う役目）、③ナカンマ（中司・進行役）、④アニンマ（お供の姉役）、⑤ウトゥガマンマ（お供の妹役）とする加藤久子の報告（加藤 2023：50）とぴったりと一致している。また、「ウフンマは儀礼全体を統括・執行する。また、カカランマは儀礼のなかでオヨシと呼ばれる歌をうたって＜中略＞神の声を聞いたり神聖な映像を幻視したりすることによって神意を受ける役割となっている。ナカンマは儀礼のなかで神前に盆を据え、供物のハナをとったり、それを分配したりする役割を担い、ウフンマの補佐役と受けとめられている」（真下 2003：194）との報告とも、概ね合致するであろう。

（19）加藤久子によれば、「ツカサンマの選出は、島に住む51歳から55歳のすべての女性が対象」（加藤 2023：50）になるという。若干の齟齬を認める。

（20）明治７（1874）年に池間島・佐良浜から分村した西原のンマユイでは、同様の方法で「連続３回落ちた者」が当該の神役に選ばれたという（上原 2017：26）。また、伊良部島・国仲では、９回落ちた時点でその候補者がツカサウマ（最高位）となり、次に多く落ちた者はオコンマ（第２位）、その次がサラピャーズウマ（第３位）に選ばれるという（大越 2010：169-170）。

（21）上原孝三は宮古島において、祭祀に参加する神役の組み合わせ（パターン）を７つに分類したが、そのすべてに、ウフンマ、アーグシャー、ナカンマの３役が含まれていた（上原 2022：222-223）。この３役こそが、祭祀を執り行なう最小単位であると分かる。

（22）詳細については別稿を期したいが、自治会長の認識では、神籤で選ばれることは巫病と同等の価値・意味があるという。比嘉政夫も「宮古島のツカサ継承は、神の託占によるくじをひくことによってその能力をもつものと判断された者に地位を継承する」（比嘉政夫 1998：54）としている。神に選ばれることは、その能力を保証されることと同義であり、すべての出発点なのだ。

（23）カカランマに選ばれた女性はマウガミを上げていたが、マウガミに傾倒するあまり、地元の神々が蔑ろになってしまった。これでは、通る願いも通らない。そのように判断して（あるいは周囲から説得されて）、自ら身を引いたという。

（24）ナカンマ就任の際にも、ムヌスーのアドバイスにしたがって、大阪の氏神様に一言、断りを入れたという。ユタに助言を求めるのは、自然で当たり前の行動といえるだろう。

（25）本来はバタイユーイ（渡し祝い）という祭祀を旧正月に行なう。そこでは、インギョウ（隠居）する先輩ツカサンマを交えて、和やかな祝いの席が設けられるのが常であったという（加藤 2023：51-52）。久しぶりの復活という状況もあり、TGさ

んの先輩ツカサンマとの関係構築はこれからといったところであろうか。

(26) 久高島では「葬式の数日後に、ユーハカラスン（世をはからす、はからすの語義は不明）と称して、死者の家族・近親者がユタのところへ赴き、「口寄せ」をしてもらう」という（赤嶺 1983：66)。同様の慣行と見てよい。また、本稿で紹介したYGさんも、親戚が亡くなれば、招かれて口寄せをすることがあるという。カンカカリャを呼ぶことなく、身内の神高い遺族が指名されて、口寄せをすることもあるようだ。ただし、YGさん自身は他人の葬式での口寄せには消極的である。当然のことながら、故人の口寄せに対する思いはさまざまだ。

(27) 赤嶺政信は、オヨシという歌の形で形式化されている時点で、神歌は形骸化しており、歌の内容に憑依の内容が規定されていると指摘した（赤嶺 2008：408)。だから、神歌による憑依は予定調和的なものに過ぎず、一回性の個別的な本来の憑依とは異なるというのである（赤嶺 1997：154)。一方で内田順子は、「憑依は、神歌にさきがけてあるのではなく、神歌の形がもたらす効果としてある」とし、これは司祭でも巫者でも同じことだと考えた（内田 1999：30)。「憑依という現象は、当該社会によって、常に事後的に意味づけられることによってしか、見いだされない」のであって、第三者が憑依をとやかく評するのは不毛だとする。YGさんの口寄せに際して、相談者が涙を浮かべていたことを思えば、筆者は後者の見解に与したい。なお、石垣島・白保でも神歌が謡われるが、それは斉唱されるものであって（石垣 2017：表202-1)、神憑りとは無縁の、まさに形骸化したもののように思われる。

(28) 狩俣のウヤガン（祖霊祭）の「神迎え（カンミケーイ)」では、「アブンマという最高神女が神謡をうたい、天から大神島の神が来臨し、南方の海から狩俣の神がくる。女たちは神道をとおって森に入り、４日のあいだ籠もって神謡をうたい、断食する」（金子 2022：24）といい、「山籠もりを経て祖霊神になった神女（ウヤガン）たち」を「ムトゥ家に詰める神司たち」が出迎えるという（金子 2022：25)。つまり、神歌を謡い、断食することによって、神女たちは祖霊神を自らに憑依させるのである。

(29) 下級神役がシャーマン的役割を担う状況（櫻井 1979：128，赤嶺 2006：410）はあくまで本島のものであり、宮古島には当てはまらない。そのように、佐々木伸一も考えている（佐々木伸一 1988：168)。なお、櫻井徳太郎は伊良部島の事例に触れつつ、オーンマ（ウフンマ)・ナカンマに次ぐ第３位にカカリャンマを位置づけている（櫻井 1979：127)。しかしこれは誤りであり、よって、神憑りを下級神役が担うのは事象のひとつに過ぎないのである。

(30) 宮古島の神役組織を総括的に扱った佐々木伸一は、「ツカサ・ユーザス型」が卓越していると報告している（佐々木伸一 1980：173)。「ツカサは線香をとり、ユーザスは神歌を唱える。どちらか１人がカンカカリ（神がかり）の能力をもつことが必要といわれている。多くはユーザスがその力をもつようである」と説明されており（佐々木伸一 1988：151)、神歌による神憑りの重要性は疑いようがない。また、上原孝三は宮古島・佐良浜における祭祀の神役組み合わせを７つに分類したが、そのいずれにも、アーグシャーが含まれていたのは無視できない（上原 2022：222-223)。

【参考文献】

赤嶺政信（1983）「村落の中の霊的職能者：久高島のウムリングァ」北見俊夫（編）『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリャー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』，筑波大学，57-70.

赤嶺政信（1997）「ノロとユタ」赤田光雄・香月洋一郎・小松和彦・野本寛一・福田アジオ（編）『神と霊魂の民俗（講座日本の民俗学７）』，雄山閣，147-160.

赤嶺政信（2008）「沖縄の祭祀とシャーマニズムについての覚書：宮古の事例を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』142，399-412.

石垣繁（2017）『八重山諸島の稲作儀礼と民俗』，南山舎.

上原孝三（1983）「西原のユークイ粗描」『沖縄文化』19（２），71-80.

上原孝三（2017）「宮古島西原のンマユイ儀礼から：村・祭祀・人をめぐっての断章」『宮古島市立総合博物館紀要』21，19-40.

上原孝三（2022）「宮古島佐良浜の年中祭祀：祭祀と供物（試論）」『宮古島市立総合博物館紀要』26，217-231.

内田順子（1999）「神歌と憑依：宮古島狩俣の神歌を対象に」『日本文学』48（５），21-31.

大越公平（1983）「奄美・加計呂麻島におけるトネヤ祝いとその祭祀集団」上野和男・大越公平（編）『奄美の神と村』（現代のエスプリ No.194），詩文堂，197-213.

大越公平（2010）「村落祭祀の変容とその要因」『国立民族学博物館研究報告』別冊３，155-179.

太田好信（1988）「女性神役の経験：八重山・黒島からの事例」『民族学研究』54（２），401-408.

大本憲夫（1983）「祭祀集団と神役・巫者：宮古群島の場合」北見俊夫（編）『南西諸島における民間巫者(ユタ・カンカカリャー等)の機能的類型と民俗変容の調査研究』，筑波大学，87-97.

岡谷公二（2019）『沖縄の聖地 御嶽：神社の起源を問う』，平凡社新書.

笠原政治（1996）「＜池間民族＞考：宮古島嶼文化の個性と文化的個性の強調」『沖縄文化研究』22，497-565.

加藤久子（2023）『ナナムイの神々を抱いて：宮古・池間と佐良浜の祭祀』，ボーダーインク.

金子遊（2022）「渚に寄りつく神々：比嘉康雄の民俗写真」田名真之（監修）『琉球・沖縄を知る図鑑』（別冊 太陽：日本のこころ303），平凡社，22-31.

鎌田久子（1965a）「日本巫女史の一節」『成城大学創立十周年記念論文集』，成城大学，388-422.

鎌田久子（1965b）「宮古島の祭祀組織」東京都立大学南西諸島研究委員会（編）『沖縄の社会と文化』，平凡社，179-202.

齋藤正憲（2022a）「南島素描01：石垣島のユタとツカサ」『白鷗大学教育学部論集』16（１），89-135.

齋藤正憲（2022b）「南島素描02：石垣島のツカサとカマンガー」『白鷗大学教育学部論集』16（２），57-91.

齋藤正憲（2023a）「南島素描03：石垣島のティーナラビとカミンチュ」『白鷗大学教育学

部論集』17（１），39-71.
櫻井徳太郎（1973）『沖縄のシャマニズム：民間巫女の生態と機能』，弘文堂.
櫻井徳太郎（1979）「沖縄民族宗教の核：祝女（ノロ）イズムと巫女（ユタ）イズム」『沖縄文化研究』６，107-147.
佐々木宏幹（1980）『シャーマニズム：エクスタシーと憑霊の文化』，中公新書.
佐々木宏幹（1983）『憑霊とシャーマン：宗教人類学ノート』，東京大学出版会.
佐々木宏幹（1991）「ユタの変革性に関する若干の覚書：シャーマン–祭司論との関連において」植松明石（編）『神々の祭祀（環中国海の民俗と文化２）』，凱風社，369-393.
佐々木伸一（1980）「宮古島の部落祭祀：その比較・統合に向けての序章」『民族学研究』45（２），180-185.
佐々木伸一（1983）「宮古島の民間巫者と神役：その重層性と分化」北見俊夫（編）『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリャー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』，筑波大学，99-106.
佐々木伸一（1988）「カンカカリ達」北見俊夫（編）『日本民俗学の展開』，雄山閣，147-177.
佐渡山安公（2019）『カンカカリャの世界』，かたりべ出版.
塩月亮子(1999)「女たちの生活ポリティクス：沖縄村落の統合と葛藤の政治人類学」『生活学論叢』４，3-13.
塩月亮子（2011）「聖地の世界遺産化と沖縄シャーマニズム：民俗知活用の視点から」嶋田義仁（編）『シャーマニズムの諸相』，勉誠出版，84-98.
塩月亮子（2012）『沖縄シャーマニズムの近代：聖なる狂気のゆくえ』，森話社.
渋谷研（1992）「対峙する神々：宗教的職能者間の対立と共存をめぐる一考察」『民族学研究』56（４），361-384.
嶋田義仁（編）（2011）『シャーマニズムの諸相』，勉誠出版.
高梨一美（1989）「神に追われる女たち：沖縄女性司祭者の就任過程の検討」大隅和雄・西口順子（編）『巫と女神（シリーズ 女性と仏教４）』，平凡社，11-50.
蛸島直（1983）「治癒者としてのユタ：沖永良部島の場合」北見俊夫（編）『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリャー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』，筑波大学，107-116.
谷川健一（2019）「神に追われて」佐渡山安公『カンカカリャの世界』，かたりべ出版，269-294.
野口武徳（1972）『沖縄池間島民俗誌』，未来社.
津波高志(1983)「祭祀組織の変化と民間巫者：沖縄本島北部一村落における巫者的司祭」北見俊夫（編）『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリャー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』，筑波大学，71-85.
鳥越憲三郎(1971)「古代琉球に於ける巫女組織」馬渕東一・小川徹(編)『古代文化論集』３（民俗編Ⅱ），平凡社，213-232.
比嘉政夫（1998）『沖縄を識る：琉球列島の神話と祭り』，歴博ブックレット④.
比嘉康雄（2000）『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』，集英社新書.
真下厚（2003）『声の神話：奄美・沖縄の島じまから』，瑞木書房.
松本雅明（1969）「沖縄における神女とその起源」『東洋文化』48・49，3-44.

宮城栄昌（1979）『沖縄のノロの研究』（オンデマンド版，2013年発行），吉川弘文館.
宮古島市教育委員会（2018）『宮古の祭祀』（宮古島市史 第２巻 祭祀編（上）地域重点捜査），宮古島市教育委員会.
宮平盛晃（2021）「沖縄県北部における祭司の実態と地域的差異：男性神役と女性神役の関係性」『島嶼研究』22（２），33-44.
吉本隆明（2016）『アジア的ということ』，筑摩書房.
山口昌男（1982）『文化人類学への招待』，岩波新書.
山口昌男（2000）『文化と両義性』，岩波現代文庫.
山下欣一（1977）『奄美のシャーマニズム』，弘文堂.
リーブラ，W.P.（1974）『沖縄の宗教と社会構造』，弘文堂.
琉球大学社会人類学研究会（1977）『白保：八重山白保村落調査報告』，根元書房.